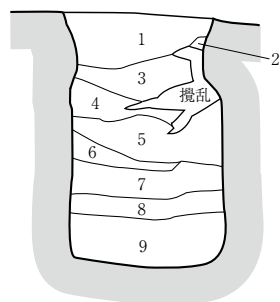


67.7m



第88図 SK15

1. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや弱、しまりやや強。地山ローム粒を微量に含む
2. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性・しまりやや弱。地山ロームブロックを斑状に含む
3. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性やや弱、しまりやや強。地山ローム粒を微量に含む
4. 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性やや弱、しまり弱。地山ローム粒を含む
5. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性やや弱、しまり弱。地山ロームブロック・ローム粒を多く含む
6. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや弱、しまり弱。地山ローム粒、礫を微量に含む
7. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性・しまり弱。地山ローム粒を微量に含む
8. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性やや弱、しまり弱。地山ローム粒を微量に含む
9. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性・しまりやや弱。地山ローム粒を含む

SK15(第88図、PL.84)

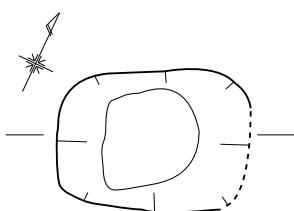
B2グリッドの中央よりやや西側にあり、標高67.5m付近の丘陵斜面に位置する。II層除去後のIII層中で検出した。西側4.6mの位置にはSK13がある。

平面形は円形を呈し、検出面での規模は、長軸が77cm、短軸が70cmを測る。断面形は縦長の長方形形状で、検出面からの深さは1.34mである。底面形は不整な方形を呈し、規模は長軸が69cm、短軸が63cmを測る。底面ピットは確認していない。

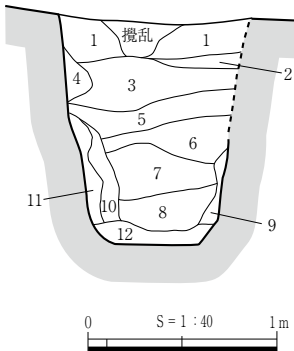
埋土は黒褐色土を主体とする9層に分層できた。水平および皿状に堆積することから、自然堆積と考える。

時期を判断できる遺物は確認していないが、埋土9層から採取した土壌を水洗選別して得た炭化物について放射性炭素年代測定を行ったところ、補正年代値 $8870 \pm 40\text{yrBP}$ (IAAA-112682)の測定結果を得た。この値は縄文時代早期前半頃の時期を示している。

埋土の状況や形態的特徴、自然科学分析の結果から、遺構の時期は縄文時代早期前半頃と考える。



70.0m



第89図 SK16

1. 黒色土 (10YR2/1) 粘性・しまりやや弱。地山ローム粒を微量に含む
2. 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性・しまりやや弱。地山ローム粒を多く含む
3. 黒色土 (10YR2/1) 粘性やや弱、しまり弱。地山ローム粒を微量に含む
4. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや弱、しまり弱。地山ローム粒・ロームブロックを多く含む
5. 黒褐色土 (7.5YR2/2) 粘性・しまりやや弱。地山ローム粒を微量に含む
6. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性・しまりやや弱。地山ローム粒を微量に含む
7. 黒褐色土 (7.5YR2/2) 粘性やや弱、しまり弱。地山ローム粒を微量に含む
8. 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性やや強、しまりやや弱。地山ロームブロックを含む
9. 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性やや強、しまりやや弱。地山ローム粒を含む
10. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性やや弱、しまり弱。地山ローム粒を多く含む
11. にぶい黄褐色土 (10YR5/3) 粘性やや強、しまりやや弱。地山ロームブロックを主体とする壁崩落土
12. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性・しまりやや強。黒色土と地山ローム由来土の混淆土

SK16(第89図、PL.84)

D3グリッドの南西隅にあり、標高69.8m付近の丘陵斜面に位置する。II層除去後のIII層中で検出した。北西側8.4mの位置にはSK9がある。遺構の東側上部付近は木の株によって壊されていた。

平面形は長方形を呈し、検出面での規模は、長軸が1.00m、短軸が0.75mを測る。断面形は逆台形状を呈し、検出面から底面までの深さは1.18mを測る。底面形は不整円形を呈し、長軸は62cm、短軸は50cmを測る。底面ピットはみられない。

埋土は黒褐色土を主体とする12層に分層できた。自然堆積であり、後世の植林による木の根が多く混じっていた。11層は壁の崩落土である。

時期を判断できる遺物は出土していないが、埋土の状況や形態的特徴から縄文時代と考える。

第4節 弥生・古墳時代の調査

1 概要(第90図)

弥生・古墳時代の遺構は、調査区中央付近の丘陵上平坦面から、その東西の緩傾斜面にかけて検出しており、弥生時代の竪穴住居跡1棟(SI 5)のほか、古墳時代の竪穴住居跡6棟(SK 1～4・6・7)、掘立柱建物跡5棟(SB 1～5)、土坑7基(SK 2～8)、溝1条(SD 1)、ピット群2ヶ所を検出した。

これらの遺構は、いずれもⅢ層中で検出したが、埋土は黒色系または黒褐色系のクロボク由来の土であり、本来はⅡ層中から掘り込まれたものと推定する。

遺構の時期は、出土遺物から、弥生時代後期前葉～中葉(清水編年V-1～2様式)と、古墳時代後期前葉(陶邑編年TK23～TK47型式併行期)の2時期からなり、遺構の密度や遺物の量からみて、古墳時代後期前葉を中心とすると考える。

包含層中や遺構埋土中からは、少量の弥生土器のほか、古墳時代の土師器や須恵器が多く出土している。土師器は煮炊用や供膳用、須恵器は貯蔵用や供膳用の器種を主体としており、日常生活の中で用途によって土師器と須恵器を使い分けていたと考える。また、竪穴住居跡内からは台石や砥石が出土しており、住居内での作業の様子もうかがえる。

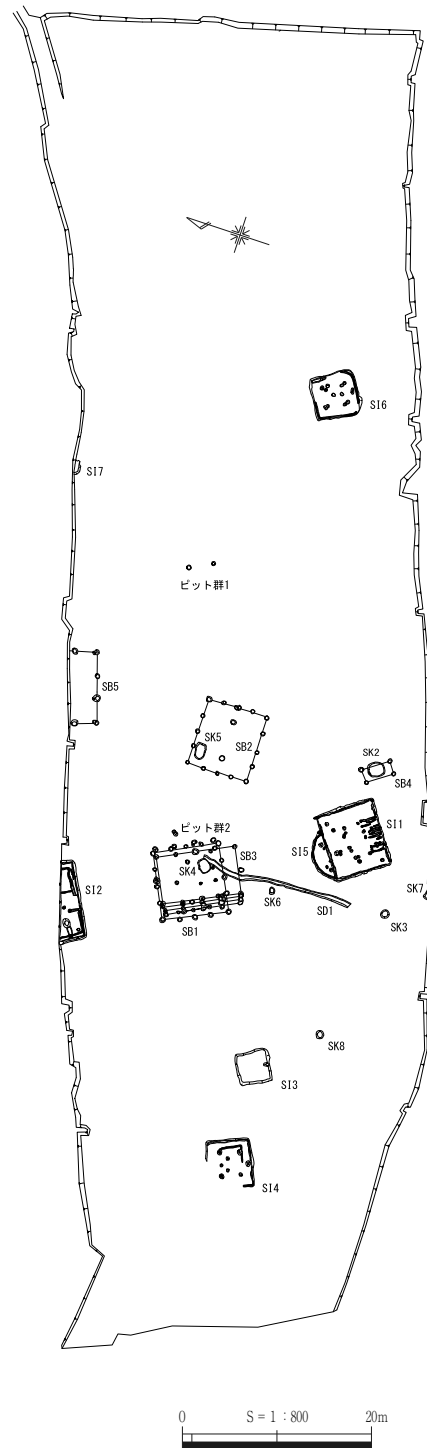
遺跡の範囲は、調査区外の南北丘陵上にも広がっており、遺跡の全体像は不明であるが、現状でわかる当遺跡は、古墳時代にあつては、大型の倉庫群を中心として、それを取り囲むように複数の住居が配置しており、当該期の集落の様相を考える上で良好な遺跡といえる。また、土師器のほか、古式の須恵器も出土することから、須恵器導入直後の集落内での食器の様相を考える上で良好な遺跡である。

2 竪穴住居跡

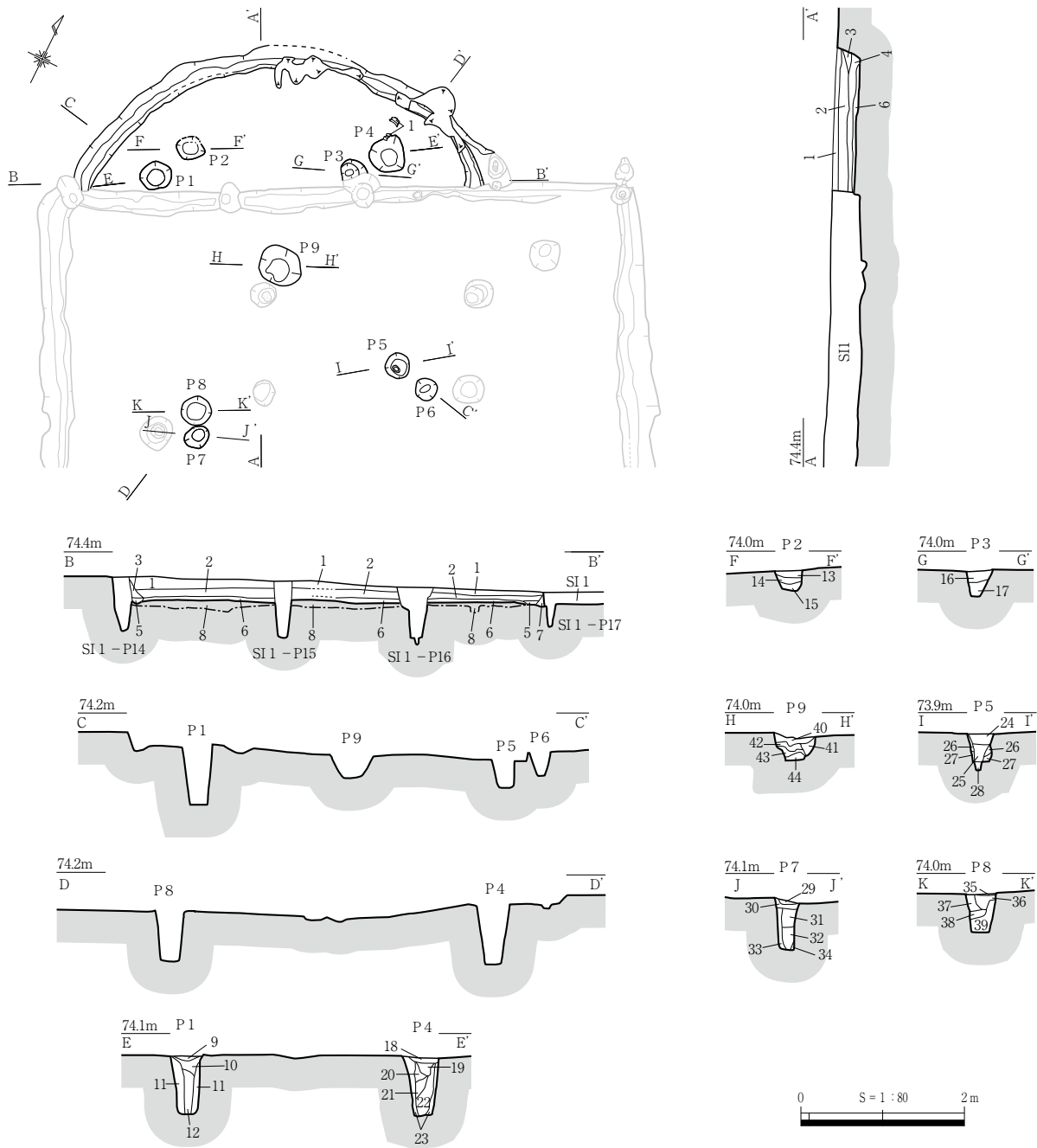
SI 5(第91・92図、表14、PL.85～87・104・116)

F 9グリッドにあり、標高73.9～74.1mの丘陵上平坦部に位置する。遺構の周辺にはSB 4のほか、SB 1・3が位置するが、同時期の遺構はみられない。

検出状況から、方形プランと円形プランの竪穴住居跡が切り合い関係にあることが確認できたため、方形プランの住居跡をSI 1、円形プランの住居跡をSI 5とした。



第90図 弥生・古墳時代の遺構分布



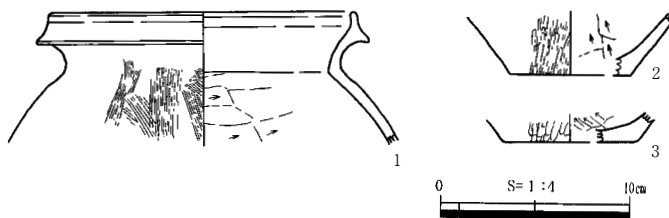
1. 黒褐色土 (10YR3/2) φ 1mm大のソフトローム粒を微量に含む
2. 黒褐色土 (10YR3/2) φ 3mm大のソフトローム粒を含む
3. 黒褐色土 (10YR3/2)
4. 黒褐色土 (2.5YR3/1)
5. 黒褐色土 (10YR3/2) φ 5mm大のソフトローム粒を含む
6. 黄褐色土 (10YR7/6) 黒褐色土が斑状に入る。貼床
7. 黄褐色土 (10YR5/6) ソフトローム土を主体として黒褐色土が斑状に入る
8. にぶい黄褐色土 (10YR6/3) ソフトローム基盤層 (IV層)
9. 黒褐色土 (10YR3/1) φ 5mm以下のソフトローム粒を含む
10. 褐灰色土 (10YR3/2) φ 5mm大のソフトローム粒を含む
11. 褐色土 (10YR4/6) ソフトローム土に黒褐色土が入り込む
12. 褐灰色土 (10YR3/2) φ 3mm以下のソフトローム粒を含む。柱痕
13. 暗褐色土 (10YR3/3) φ 1cm大のソフトローム粒を含む
14. 褐色土 (10YR4/6) ソフトローム由来土
15. 明褐色土 (7.5YR5/6) ソフトローム・ホワイトロームを含む
16. 暗褐色土 (10YR3/3) ソフトロームブロックを含む
17. 黄褐色土 (10YR5/6) ソフトローム由来土
18. 黒褐色土 (10YR2/2) φ 2mm大のソフトローム粒を微量に含む
19. 黒褐色土 (10YR2/3) φ 1cm大のソフトローム粒を含む
20. 黒褐色土 (10YR3/2) ソフトロームブロックを多量に含む
21. 黒褐色土 (10YR3/2) φ 5mm大のソフトローム粒を多量に含む
22. 黒褐色土 (10YR3/3) φ 1cm大のソフトローム粒を多量に含む。柱痕
23. にぶい黄褐色土 (10YR5/4) ソフトローム由来土・黒褐色土を多量に含む
24. 暗褐色土 (10YR3/4) φ 3mm以下のソフトローム粒を含む
25. 褐色土 (10YR4/6) ソフトローム粒を多量に含む、炭を微量に含む
26. 黄褐色土 (10YR5/6) ソフトローム粒を多量に含む
27. 明黄褐色土 (10YR6/8) ソフトローム由来土
28. 黄褐色土 (10YR5/8)
29. にぶい黄褐色土 (10YR4/3)
30. 黒褐色土 (10YR2/2) ソフトロームブロックを含む
31. 灰黄褐色土 (10YR4/2) ソフトロームブロックを含む。柱痕
32. 黒褐色土 (10YR2/3) φ 1cm大のソフトローム粒を含む。柱痕
33. 黒褐色土 (10YR3/2) φ 5mm大のソフトローム粒を含む
34. 明黄褐色土 (10YR6/6) ソフトローム由来土
35. 黒褐色土 (10YR5/6) 黒褐色土・ソフトローム塊が混ざる。SI1 貼床
36. 黒褐色土 (10YR3/2) φ 2cm大のソフトローム塊を含む
37. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) ソフトローム粒を多く含む
38. 黄褐色土 (10YR5/6) ソフトローム由来土
39. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) ソフトローム粒を多く含む
40. 黒褐色土 (10YR3/2) φ 5mm大のソフトローム粒を含む、炭を含む
41. 灰黄褐色土 (10YR4/2) φ 5mm大のソフトローム粒を多量に含む
42. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) φ 2cm大のソフトローム塊を含む
43. 褐色土 (10YR4/6) ソフトローム由来土
44. 黄褐色土 (10YR5/6) ソフトローム由来土

第91図 SI5

表14 SI5ピット一覧

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ)cm	備考
P1	40×34-71	柱痕あり(径10cm)
P2	36×28-24	
P3	32×※32-32	
P4	42×41-72	柱痕あり(径16cm)
P5	30×29-34	
P6	28×28-30	
P7	32×26-62	柱痕あり(径14cm)
P8	37×35-62	
P9	52×46-30	

※は推定値



第92図 SI5出土遺物

SI5は、SI1によって床面ごと壊されており、全体の3分の1ほどが残存している状態であった。

規模は、壁面の立ち上がりや、柱穴の間隔から推測すれば、直径5.8m程度に復元できる。住居跡の壁面に沿って、幅10～15cm前後、深さ5cmの壁溝を確認した。

埋土は、1～6層を確認した。このうち1～5層は自然堆積で、地山ソフトローム粒を含んだ黒褐色土を中心とする。6層は貼床である。

柱穴は、SI5の床面精査中にP1～P4を、SI1の貼床除去中にP5～P9の計9基を検出した。検出した柱穴の規模や配置から、P1・P4・P5・P8が主柱穴であると考ええる。主柱穴の規模は、P1・P4の径が34～42cmで、深さが71～72cmを測り、P5・P8の径が29～37cmで、深さが34～62cmを測る。P1・P4は、SI5の床面からの深さであるのに対して、P5・P8は、SI1の貼床下面からの深さであるため、計測値が小さくなるが、本来はP1・P4と同程度の深さとなるを考える。主柱穴間の距離は、P1-P4間が2.9m、P4-P5間が2.6m、P5-P8間が2.5m、P8-P1間が2.9mを測る。

そのほか、各主柱穴の近辺にも柱穴(P2・P3・P6・P7)を確認している。これらの柱穴は、主柱穴と比べて小規模であることや、住居跡の周囲の壁溝に拡張した痕跡が認められないことから、建て替えに伴うものではなく、補助的な役割をもった柱穴の可能性はある。また、P9はいわゆる中央ピットであり、平面形は不整形で、埋土はソフトローム由来の黄褐色土を主体とし、上面をSI1の貼床が覆っていた。

なお、P1・P4・P7の土層断面からは柱痕跡が確認でき、そこから復元できる柱径はそれぞれ10cm、16cm、14cmとなる。

出土遺物は、SI1に壊されていたこともあり、少量を確認したにすぎない。1は、床面より出土した弥生土器の甕で、口縁部～胴部上半の破片である。口縁部は断面三角形状を呈し、凹線文を施さず、ナデで仕上げられている。調整は、外面の頸部～胴部をハケメ、内面の胴部をヘラケズリしている。2・3は甕の底部片である。外面はミガキ、内面はヘラケズリが施されている。時期は、1が清水編年V-1様式に比定できる。

遺構の時期は、出土遺物から弥生時代後期前葉と考える。

SI5は、SI1によって床面ごと壊されており、全体の3分の1ほどが残存している状態であった。

規模は、壁面の立ち上がりや、柱穴の間隔から推測すれば、直径5.8m程度に復元できる。住居跡の壁面に沿って、幅10～15cm前後、深さ5cmの壁溝を確認した。

埋土は、1～6層を確認した。このうち1～5層は自然堆積で、地山ソフトローム粒を含んだ黒褐色土を中心とする。6層は貼床である。

柱穴は、SI5の床面精査中にP1～P4を、SI1の貼床除去中にP5～P9の計9基を検出した。検出した柱穴の規模や配置から、P1・P4・P5・P8が主柱穴であると考ええる。主柱穴の規模は、P1・P4の径が34～42cmで、深さが71～72cmを測り、P5・P8の径が29～

SI 1 (第93～97図、表15、PL.85・87～89・104・108・109・118)

F 9 グリッドにあり、標高73.8～74.2mの丘陵上平坦部にて検出した竪穴住居跡である。遺構の北側にはSB 1・3が、北東側にはSB 2が、南東側にはSB 4がそれぞれ隣接する。また、弥生時代の円形竪穴住居跡であるSI 5を壊している。

平面形が方形を呈する竪穴住居跡で、規模は、東西が7.4m、南北が6.2mで、検出面からの深さは最大で48cmであり、床面積は、40.0㎡である。主軸方向は、N-26°-Wである。

埋土は、黒褐色土を中心とする10層に分層でき、そのうち1～4層は自然堆積である。11層は貼床で、黒褐色土とソフトローム塊の混淆土であり、床面全体に広がる。

柱穴は、貼床上面と貼床除去後の地山面において検出した。このうち、規模や各柱穴間の対応関係からP 1～P 4が支柱穴であると推測する。ただし、これらの柱穴は、住居内の中央より北側に片寄って配置されていた。規模は径が26～38cm、深さが40～60cm程度である。支柱穴間の距離は、P 1-P 2間が2.5m、P 2-P 3間が1.1m、P 3-P 4間が2.5m、P 4-P 1間は1.2mである。

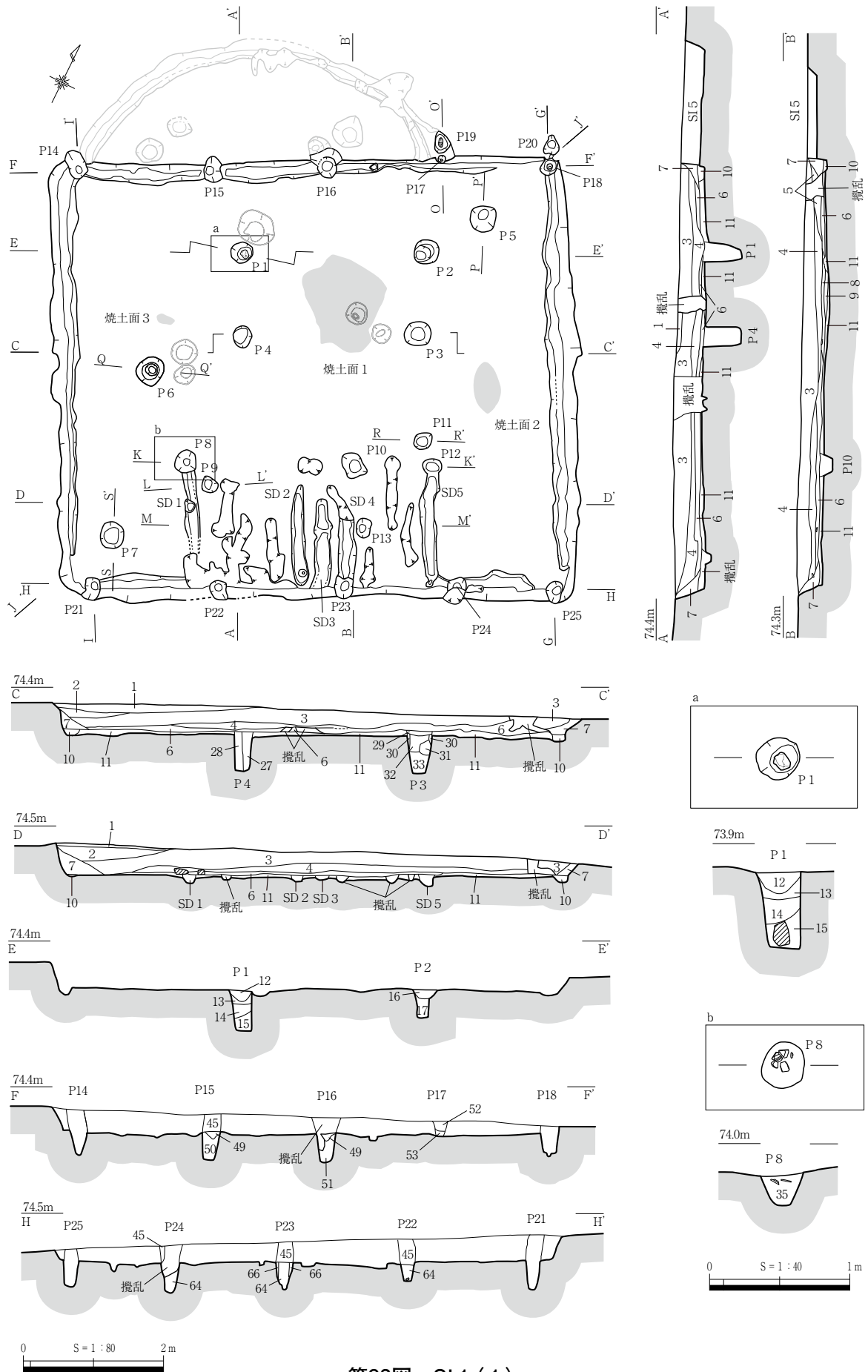
そのほか、住居内の北東隅にP 5、南西隅にP 7を検出したが、住居跡の4隅すべてには柱穴を確認できなかった。P 6は、住居跡の西側中央にて検出し、規模は径が40×36cm、深さが65cmで、SI 1の柱穴の中で規模が最大のものであるが、対となる柱穴は確認できなかった。住居跡の南側付近では、P 8～P 13を検出したが、いずれも支柱穴と比べて規模が小さい。

住居内の壁際では壁溝を確認した。断面台形状を呈し、規模は幅が20cm前後、深さが10cmほどである。壁溝は、住居内の4隅や南壁側の一部で途切れており、住居内でも標高の低い東側部分では、貼床を厚くして、溝の深さを調節している。

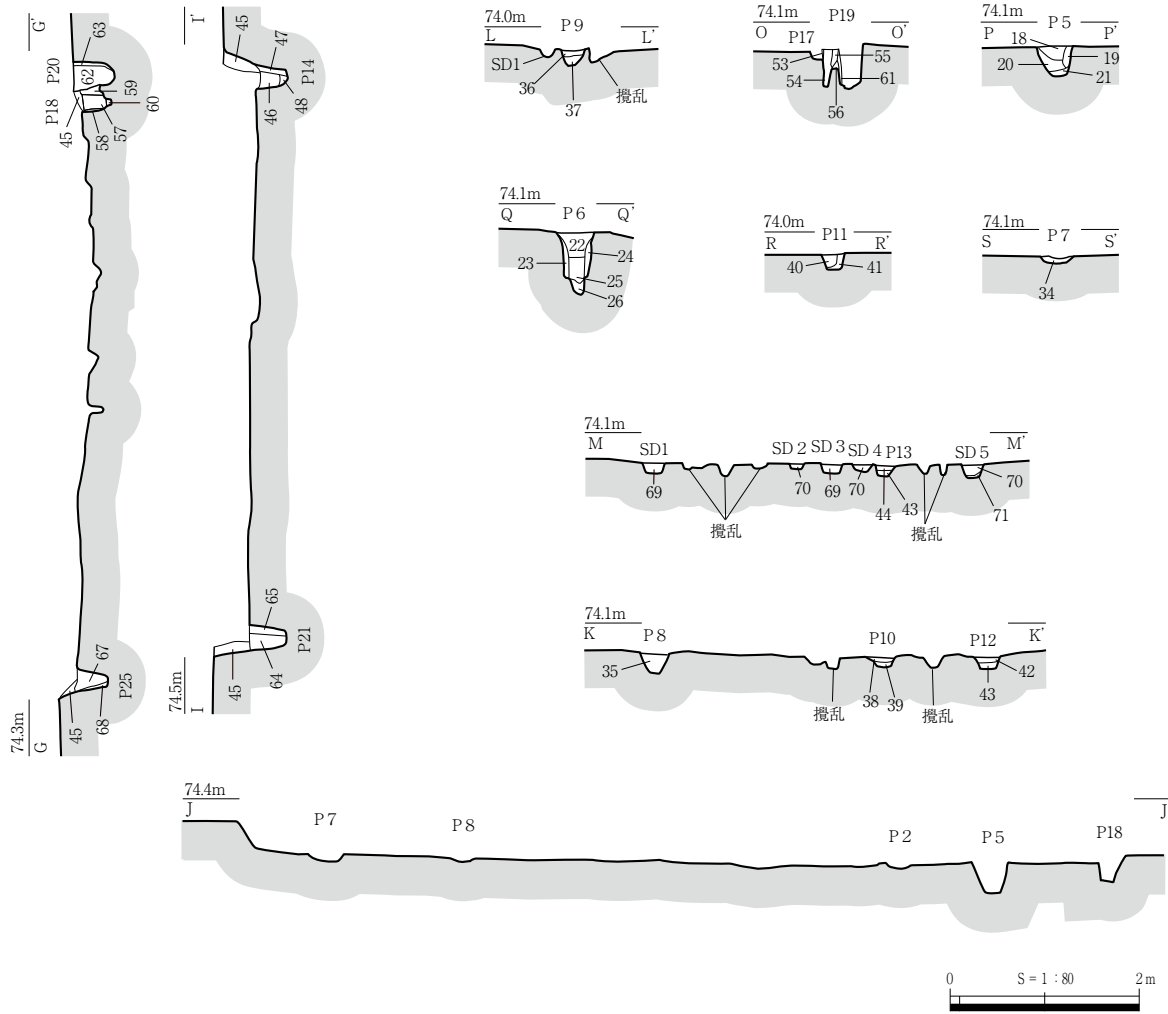
また、南北両側の壁溝内では、それぞれ5基の小規模な柱穴が等間隔に並んでおり、北側をP 14～P 18、南側をP 21～P 25とした。東西両側の壁溝内には、柱穴が確認できなかった。これらの柱穴の規模は、径が20cm前後のものが多く、床面からの深さが25～40cm程度であり、柱穴間の距離は1.6～1.8mを測る。住居跡の壁面の観察からは、これらの柱穴が壁面に接して立てられることが確認できた。また、北側の柱穴列のうち、P 17とP 18のすぐ外側の住居外において、それぞれP 19とP 20を確認したが、この部分が住居への出入口であった可能性がある。

表15 SI 1ピット一覧

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ)cm	備考	ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ)cm	備考
P1	31×30-56		P14	40×26-32	
P2	35×35-40		P15	36×26-40	
P3	38×34-60		P16	32×26-40	
P4	30×26-54		P17	10×10-28	
P5	38×36-34		P18	22×20-28	
P6	40×36-65		P19	30×22-46	
P7	38×34-8		P20	22×20-42	
P8	34×30-22		P21	32×20-42	
P9	24×20-16		P22	28×24-24	
P10	22×20-10		P23	30×26-40	柱痕あり(径12cm)
P11	28×24-16		P24	28×※24-42	
P12	28×20-14		P25	32×24-38	
P13	30×20-12				※は推定値

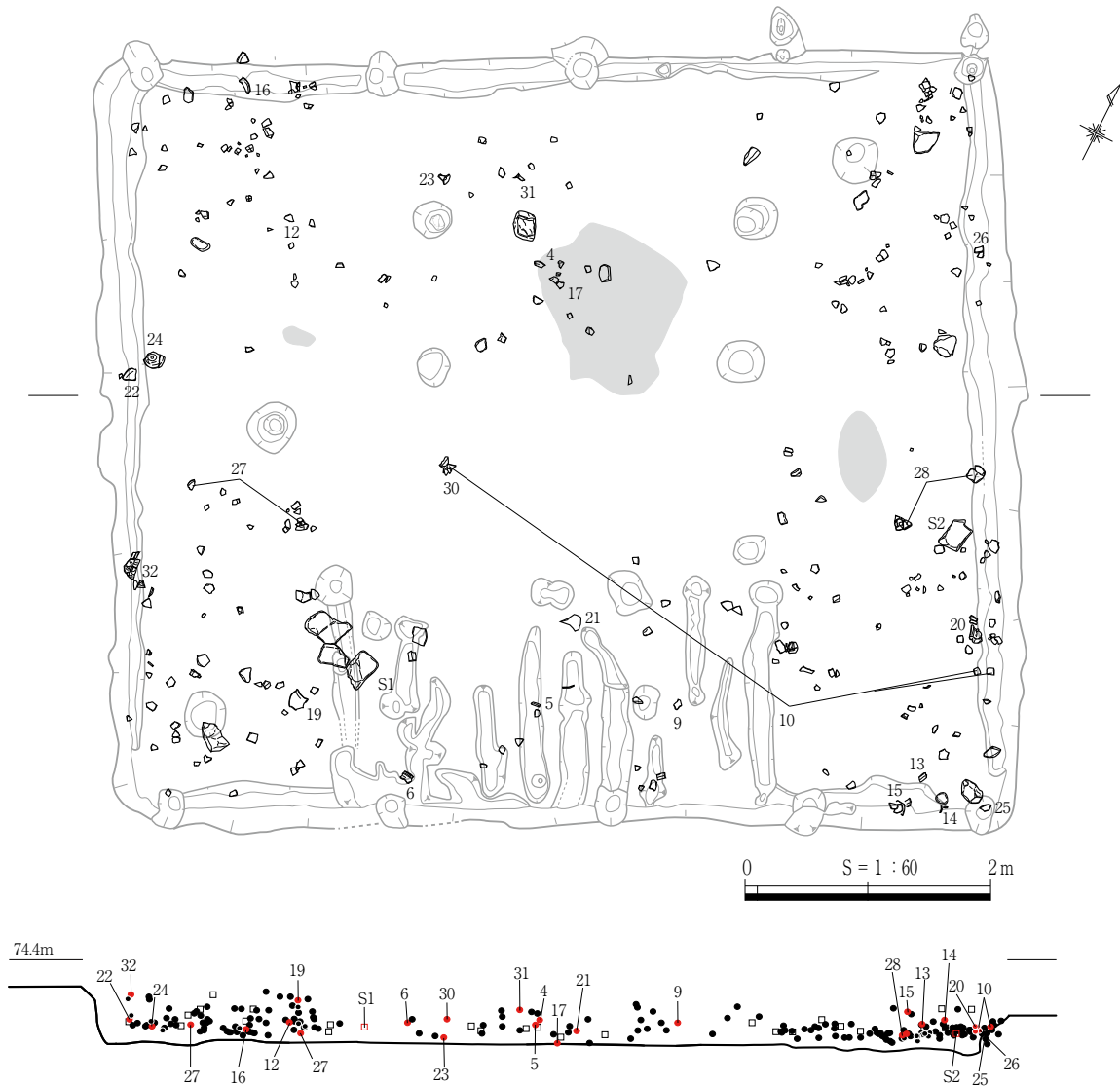


第93図 SI 1 (1)



1. 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性・しまりともにやや弱。φ1mm以下のソフトローム粒を微量に含む
2. 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性・しまりともにやや弱。にぶい橙色土を含む
3. 黒褐色土 (2.5YR3/1) 粘性・しまりともにやや弱。φ~2cmのソフトロームを多量に含む
4. 黒褐色土 (7.5YR3/1) 粘性やや強、しまりやや弱。φ~1cm大のソフトロームを含む
5. 黒褐色土 (7.5YR3/1) 粘性やや強、しまりやや弱。φ~1cm大のソフトローム粒を微量に含む
6. 黒褐色土 (2.5YR3/1) 粘性・しまりともにやや弱
7. 黒褐色土 (2.5YR3/1) 粘性やや強、しまりやや弱。φ~5mm大のソフトローム粒を微量に含む
8. 黒褐色土 (7.5YR3/1) 粘性やや弱、しまり弱。明赤褐色の被熱痕跡
9. 暗赤灰色土 (2.5YR3/1) 粘性弱、しまりやや弱。明赤褐色の被熱痕跡
10. 黒褐色土 (2.5YR3/1) 粘性やや強、しまりやや弱。ソフトローム塊を含む
11. 明黄褐色土 (10YR6/8) 粘性・しまりともに強。粘床
12. 黒色土 (10YR2/1) 粘性・しまりともにやや弱。φ~5mm大のソフトローム粒を微量に含む
13. 灰黄褐色土 (10YR4/2) 粘性やや強、しまりやや弱。黒色土とφ~1cm大のソフトローム粒を微量に含む
14. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 粘性やや弱、しまり弱。ソフトローム粒~塊を多量に含む
15. 褐色土 (10YR4/6) 粘性・しまりともにやや強。ソフトローム由来土
16. 褐灰色土 (10YR4/1) 粘性やや弱、しまりやや強。黒褐色土とソフトロームを斑に含む。炭を微量に含む
17. 褐色土 (10YR4/4) 粘性やや弱、しまり弱。ソフトロームを主体として黒褐色土塊が微量に混ざる
18. 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性・しまりともにやや強。φ~5mm大のソフトローム粒と炭を微量に含む
19. 褐灰色土 (10YR4/1) 粘性・しまりともにやや弱。ソフトロームを多量に含む
20. 黄褐色土 (10YR5/8) 粘性・しまりともに弱。黒色土を微量に含む
21. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 粘性・しまりともにやや弱。褐灰色土を含む
22. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性やや弱、しまり弱。φ~5mm大のソフトローム粒を微量に含む
23. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性・しまりともにやや弱。φ~5mm大のソフトローム粒を多量に含む
24. にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 粘性・しまりともにやや弱。黒色土を主体としてソフトロームを多量に含む
25. 黒色土 (10YR2/1) 粘性やや弱、しまりやや強。ソフトローム塊を微量に含む
26. 明褐色土 (7.5YR5/6) 粘性やや弱、しまり弱。ソフトロームを主体として黒色粒を微量に含む
27. 黒色土 (10YR2/1) 粘性やや強、しまり弱。φ~5mm大のソフトローム粒を微量に含む
28. 褐色土 (10YR4/4) 粘性やや強、しまりやや弱。ソフトロームを主体として黒褐色土が混ざる
29. 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性・しまりともにやや弱。φ~1cm大のソフトロームを微量に含む
30. 明黄褐色シルト (10YR6/6) ソフトローム由来土
31. 褐色土 (10YR4/4) 粘性・しまりともに弱。黒褐色土を主体としてソフトロームを多量に含む
32. 明黄褐色土 (10YR6/6) 粘性やや強、しまりやや弱。ソフトロームを主体として黒褐色土を微量に含む
33. 褐色土 (10YR4/6) 粘性やや強、しまりやや弱。ソフトロームを主体として黒色粒を含む
34. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、しまりやや弱。ソフトロームを含む
35. 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性やや弱、しまりやや強
36. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性やや強、しまりやや弱。φ~3mm以下のソフトローム粒と炭を微量に含む
37. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 粘性・しまりともにやや弱。炭を微量に含む
38. 褐灰色土 (10YR5/1) 粘性やや弱、しまりやや強。炭を含む
39. 黄褐色土 (10YR6/3) 粘性やや弱、しまりやや強
40. 褐灰色土 (10YR4/1) 粘性・しまりともにやや弱。黒色土を主体としてソフトローム粒を含む
41. にぶい黄褐色土 (10YR6/4) 粘性・しまりともに弱
42. 黒褐色土 (7.5YR3/1) 粘性・しまりともにやや強。ソフトローム粒を多量に含む。炭を含む
43. にぶい黄褐色土 (10YR6/3) 粘性・しまりともにやや強。ソフトロームを含む
44. 黒褐色土 (7.5YR3/1) 粘性・しまりともにやや強
45. 褐灰色土 (10YR4/1) 粘性やや強、しまりやや弱。ソフトロームを含む
46. 褐灰色土 (7.5YR5/1) 粘性やや強、しまりやや弱。ソフトロームを多量に含む
47. 褐灰色土 (10YR5/1) 粘性やや強、しまりやや弱。ソフトロームを多量に含む
48. 褐灰色土 (10YR5/1) 粘性やや強、しまりやや弱。ソフトロームを含む
49. 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性・しまりともにやや弱。φ~1cm大のソフトローム粒を含む
50. 褐灰色土 (10YR4/1) 粘性やや弱、しまり弱。ソフトロームと黒褐色土が混在する
51. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性・しまりともに弱。ソフトローム粒子を多量に含む
52. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性やや強、しまりやや弱。SI5埋土を含む
53. 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性やや強、しまりやや弱。ソフトローム塊を多量含む
54. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性・しまりともにやや弱。φ~2mm大のソフトローム粒を微量に含む
55. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや弱、しまり弱。φ~5mm大のソフトローム粒を微量に含む
56. 黄褐色土 (10YR5/6) 粘性・しまりともにやや弱。黒褐色土を含む
57. 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性・しまりともにやや弱。φ~5mm大のソフトローム粒を多量に含む
58. 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性・しまりともにやや弱。ソフトローム粒を微量に含む
59. にぶい黄褐色土 (10YR5/4) ソフトローム
60. 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性やや強い、しまりやや弱。φ~5mm大のソフトローム粒を含む
61. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性・しまりともにやや弱。φ~5mm大のソフトローム粒を多量に含む
62. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性・しまりともに弱。ソフトローム粒子を微量に含む
63. 褐色土 (10YR4/4) 粘性やや弱、しまり弱。ソフトローム由来土。黒褐色土を含む
64. 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性・しまりともにやや弱。φ~3mm大のソフトローム粒と炭を微量に含む
65. 褐灰色土 (7.5YR4/1) 粘性やや強、しまりやや弱。ソフトローム塊が斑に入る
66. 褐灰色土 (10YR4/1) 粘性・しまりともにやや弱。ソフトローム粒子を多量に含む
67. 褐灰色土 (7.5YR4/1) 粘性・しまりともにやや弱。ソフトローム塊を多量に含む
68. 褐灰色土 (10YR4/1) 粘性・しまりともにやや弱。φ~5mm大のソフトローム粒を含む
69. 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性・しまりともにやや弱。φ~5mm大のソフトローム粒を含む
70. 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性・しまりともにやや強。φ~2mm大の風化礫と黒を微量に含む
71. 明黄褐色土 (10YR7/6) 粘性やや強、しまりやや弱

第94図 SI1(2)

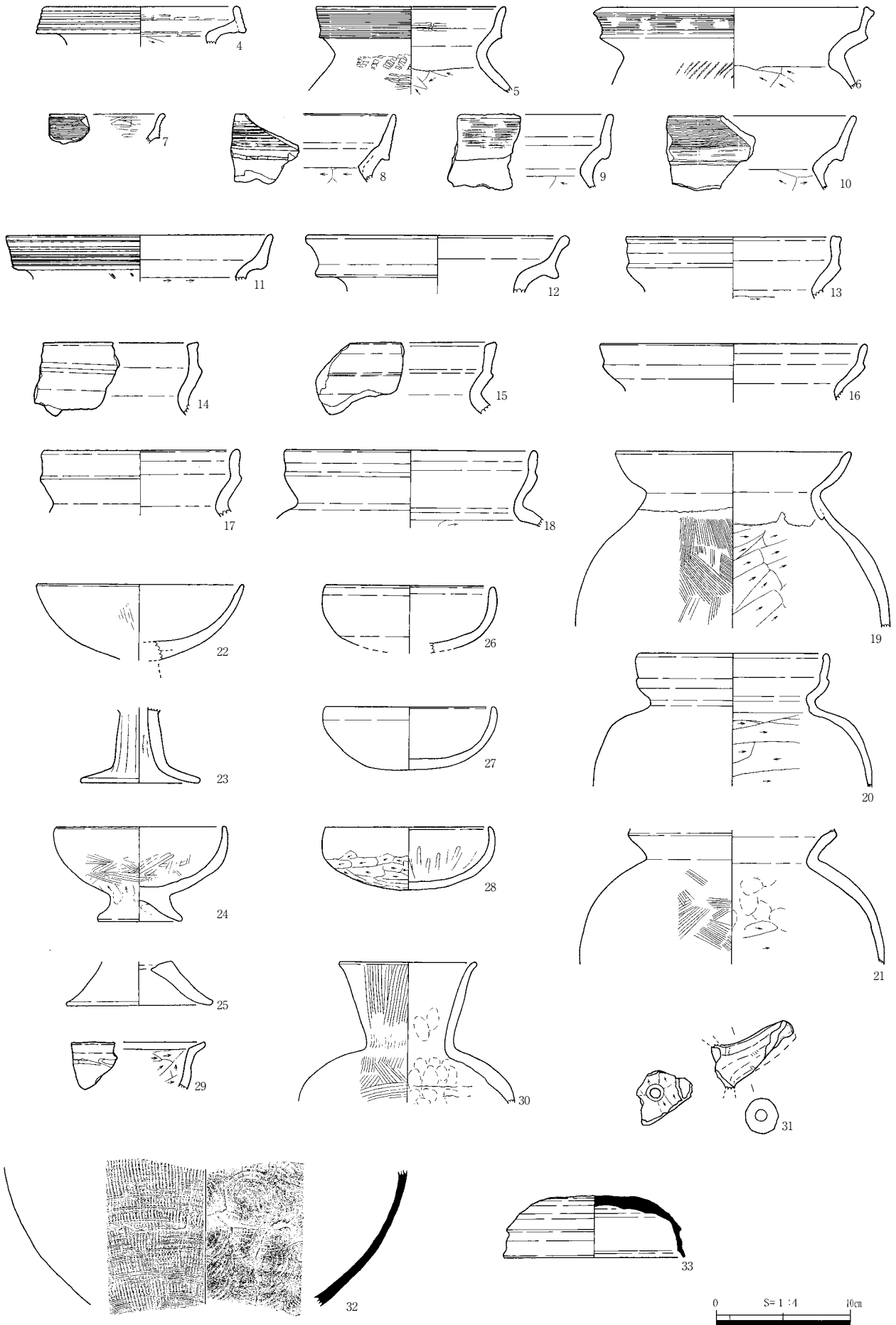


※数字は、本報告における遺物番号と対応する。

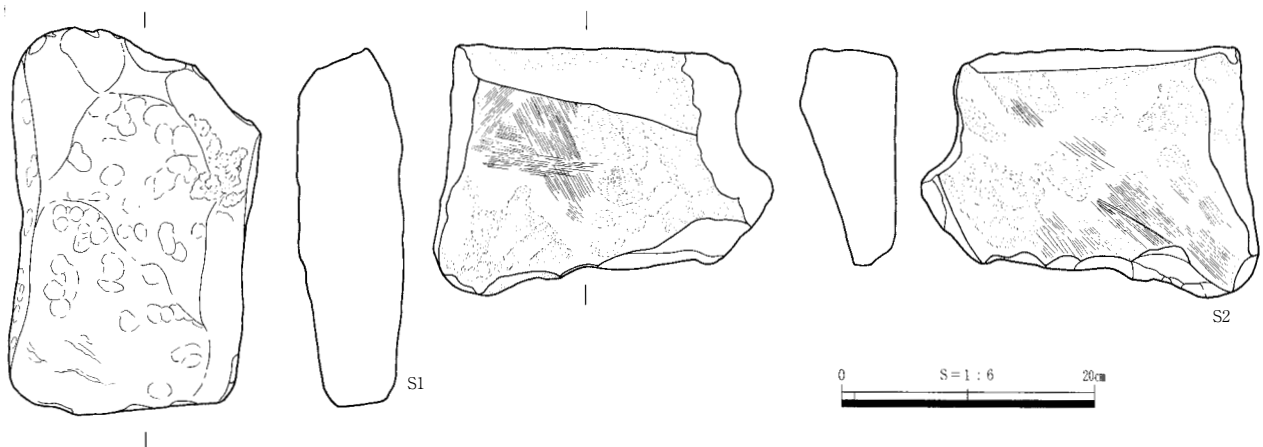
第95図 SI 1 (3)

住居内の南側では、南北に伸びる細い溝を5条検出した。溝は部分的に攪乱を受けており、範囲を明確に捉えることが困難であったが、平面形のほか、埋土や掘り方の観察から、SD 1～5が住居跡にともなう溝と捉えた。溝は南壁面から北側へ向かって1.6mほど伸びており、幅が20cm前後、深さが10～14cmを測る。SD 1を西端、SD 5を東端として、その間の中央部分にSD 2～4の3条の溝が平行して並ぶ。とくにSD 1とSD 5は規模が大きく、溝の北側先端でそれぞれP 8とP 12に連結する。これらのほかにも、南北に延びる溝状の凹みいくつかあり、平面形や埋土の状況から攪乱と判断したが、住居跡にともなう溝であった可能性もある。これらの溝は、住居内の間仕切りの施設であったと考える。

住居床面では、焼土面を3カ所検出した。焼土面1は、中央より北寄りにあり、1.4×1.2mの範囲で不整形の広がりを確認した。貼床面下のAT層まで被熱が及んでいた。焼土の周囲には支柱穴であるP 1～P 4があり、焼土面1と関係する可能性がある。焼土面2は、住居跡の中央東端付近にあり、72×36cmの範囲で楕円形状の広がりを確認した。焼土面3は、住居跡の中央西端付近にあり、わ



第96図 SI 1 出土遺物(1)



第97図 S1出土遺物(2)

ずかな範囲で被熱がみられた。

遺物は埋土中を中心に多く出土した。4～11は、3～4層から出土した弥生土器である。4は複合口縁壺で、口縁部に4条の擬凹線が廻る。5～11は複合口縁甕で、いずれも口縁部に平行沈線文を入れる。時期は、いずれも清水編年のV-2～3様式、すなわち弥生時代後期中葉～後葉と考える。

12～31は土師器である。12は複合口縁壺で、複合口縁の接合部が丸みをもって突出し、口縁部が大きく外反する。13～18・20・21は複合口縁甕である。このうち、17・18・21は6層から出土した。19は素口縁の甕、22・23は高坏、24・25は脚付碗、26～29は碗であり、22～28はいずれも6・7層から出土しており、25はP25埋土中から出土した破片と接合した。30は直口壺で、31は注口土器の注ぎ口の部分である。時期は、12が天神川VI期併行、すなわち古墳時代中期中葉であり、他はいずれも天神川IX期、すなわち古墳時代後期前葉と考える。

32・33は須恵器である。33は坏蓋で、壁溝上面より出土した。32は甕で、外面は平行タタキ、内面は同心円文の当て具痕をナデ消している。時期は、陶邑編年のTK47型式併行期、すなわち古墳時代後期前葉と考える。

S1・S2は台石である。S1は、表面に敲打痕がみられ、S2は、両面に線状の擦痕がみられる。

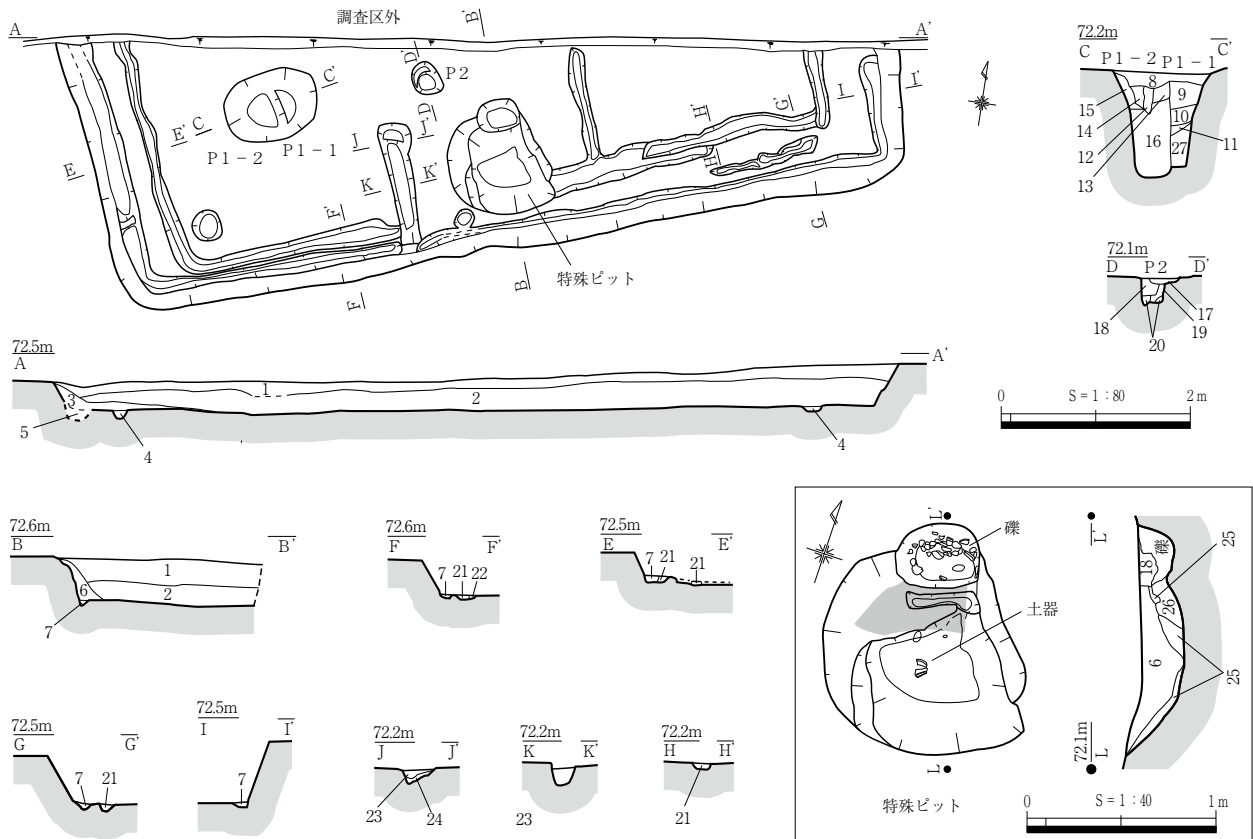
遺構の時期は、6層と7層から出土した土器から、古墳時代後期前葉と考える。埋土中から出土した弥生土器は、SI5にともなうものか、周辺からの流れ込みと考える。

遺構の性格は、住居跡と考えるが、建物の上部構造を支えるのに十分な支柱穴が確認できなかったこと、南北の壁溝内にそれぞれ5基の柱穴が等間隔に並ぶことから、壁立建物の可能性がある。

SI2 (第98～100図、PL.90・91・110・127)

調査区の中央より西寄り、C10グリットにあり、標高72.3～72.4m付近の丘陵上平坦面に位置する。II層除去後のIII層中で検出した。南側約8mにはSB1およびSB3がある。北側の大部分は調査区外のため未掘削であり、住居跡の南側3分の1程度を検出できた。

平面形は方形と推定する。検出面での規模は、東西方向が8.6m、南北方向が2.9m以上を測る。検出面からの深さは最も深いところで44cmを測る。残存部分での床面積は23.0㎡となる。主軸はN-19°-Wとなる。住居跡の周囲には幅9～25cm、深さ5cm程度の溝がめぐり、その内側にも幅9～30cm、深さ5cm程度の溝がめぐることから、建て替えが行われ、拡張されたと考える。

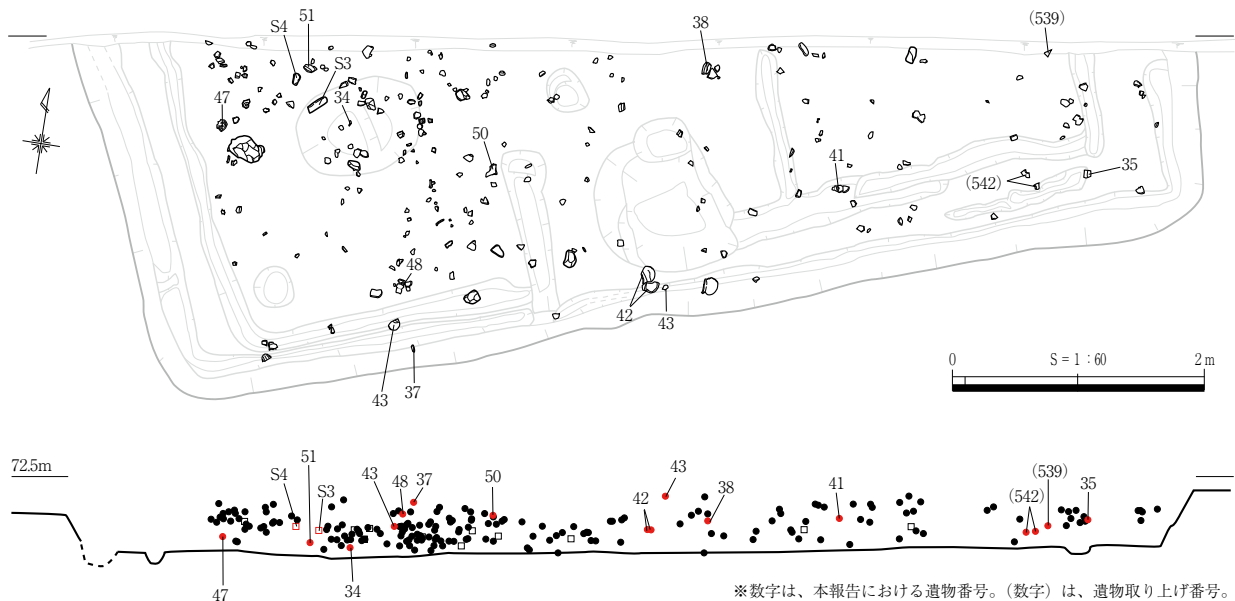


1. 黒色土 (10YR2/1) 粘性・しまりともにやや強
2. 黒色土 (10YR17/1) 粘性・しまりともにやや強。地山ローム粒・ロームブロックを多く含む(東側に多い)
3. 暗褐色土 (10YR4/3) 粘性・しまりともにやや強。クロボクとソフトロームの混濁土
4. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性・しまりともに強。クロボクとソフトロームの混濁土。壁溝埋土
5. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性強、しまりやや強。クロボクとソフトロームの混濁土。壁溝埋土
6. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性・しまりともにやや強。φ1~2mmの地山ローム粒をやや密に含む
7. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや強、しまり強。地山ローム粒・ロームブロックを密に含む。壁溝埋土
8. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、しまりやや弱。φ1mm以下の地山ローム粒を密に含む
9. におい橙色土 (7.5YR7/4) 粘性・しまりともに強。地山ハードロームとクロボクの混濁土。P1-1埋土
10. 浅黄橙色土 (7.5YR8/6) 粘性強、しまりやや弱。地山ローム由来土。P1-1埋土
11. におい橙色土 (7.5YR7/4) 粘性強、しまりやや弱。地山ローム由来土。P1-1埋土
12. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性・しまりともに弱。クロボクとソフトロームの混濁土。P1-2埋土
13. 明褐色土 (7.5YR5/6) 粘性やや強、しまり強。ソフトロームとクロボクの混濁土。P1-2埋土
14. 褐色土 (10YR4/4) 粘性・しまりともにやや強。ソフトロームとクロボクの混濁土。P1-2埋土
15. 橙色土 (7.5YR6/6) 粘性・しまりともにやや弱。ソフトローム・ハードロームとクロボクの混濁土。P1-2埋土
16. 明褐色土 (7.5YR5/6) 粘性・しまりともにやや弱。ソフトローム・ハードロームとクロボクの混濁土。P1-2埋土
17. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性・しまりともにやや弱。φ1mm以下の地山ローム粒を多く含む。P2埋土
18. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性・しまりともにやや強。地山ローム粒・ロームブロックをやや密に含む
19. 浅黄橙色土 (10YR8/4) 粘性・しまりともに強。地山ローム由来土。P2埋土
20. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性・しまりともにやや強。ソフトロームとクロボクの混濁土。P2埋土
21. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性・しまりともにやや強。地山ロームブロックを密に含む。壁溝埋土
22. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性・しまりともにやや強。地山ロームブロックを密に含む。壁溝埋土
23. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性やや強、しまり強。地山ローム粒・ロームブロックをやや密に含む
24. 褐色土 (10YR4/4) 粘性、しまりともに強
25. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性強、しまりやや強。地山ロームブロックをやや密に含む
26. におい橙色土 (7.5YR7/4) 粘性・しまりともに強。ハードローム由来土
27. 10層と同質。P1-1埋土

第98図 SI2(1)

埋土は黒褐色土または暗褐色土を主体とする3層に分層でき、自然堆積と考える。壁溝埋土は内側が暗褐色土、外側が黒褐色土をそれぞれ主体とし、粘性・しまりともにやや強い。

主柱穴はP1の1基しか確認できなかったため、本数や配置は不明である。P1は埋土の観察等から、内側の柱穴P1-1から外側の柱穴P1-2へ建て替わったと考える。P1-1の埋土は橙色系の粘性の強い地山ハードロームをベースとし、P1-2が地山ソフトローム由来土やハードローム由来土、クロボクの混じる明褐色土を主体としており、P1-1を埋め戻した後、P1-2を掘削したと考える。規模は、P1-1は径が70cm程度、深さが1.0mで、P1-2は径が70cm程度、深さが1.1mを測る。また、P2は主柱穴ではないが、規模は径が約35cm、深さが24cmを測る。



第99図 SI 2 (2)

住居跡の南壁際中央ではいわゆる特殊ピットと、その東西両側に南北に延びる溝を検出した。特殊ピットは、平面が不整な楕円形状を呈し、検出面での規模は長軸が1.22m、短軸が0.98mを測る。断面は半卵状を呈し、深さは最大で22cmを測る。北側部分に長軸が43cm、短軸が34cmのほぼ平面楕円形の凹みをつくるが、凹みの南側は地山ハードローム由来土を土手状に盛っており(26層)、その中には礫が詰められていた。また、特殊ピットの両側の溝は、東側で長さが1.2m、幅が12～16cm、深さが5cm程度を測り、西側で長さが1.3m、幅が20～25cm、深さが18cm程度を測る。

遺物は、埋土中から土師器(34～48)と須恵器(49～51)、石器(S 3・S 4)が出土した。34～36・38が複合口縁甕の口縁部片であり、37・39・40がその他の甕の口縁部片である。42・48は小型丸底壺、43・44は碗、45～47は脚付碗の脚台部である。49は坏蓋の天井部片で、50・51は甕の口頸部片である。S 3は砥石で、S 4は磨製石斧である。特殊ピットの底面付近でも土師器片が出土したが、小片のため図化しなかった。

遺構の時期は、須恵器甕が陶邑編年のTK23型式併行期に、土師器が天神川Ⅸ期に比定できることから、古墳時代後期前葉と考える。

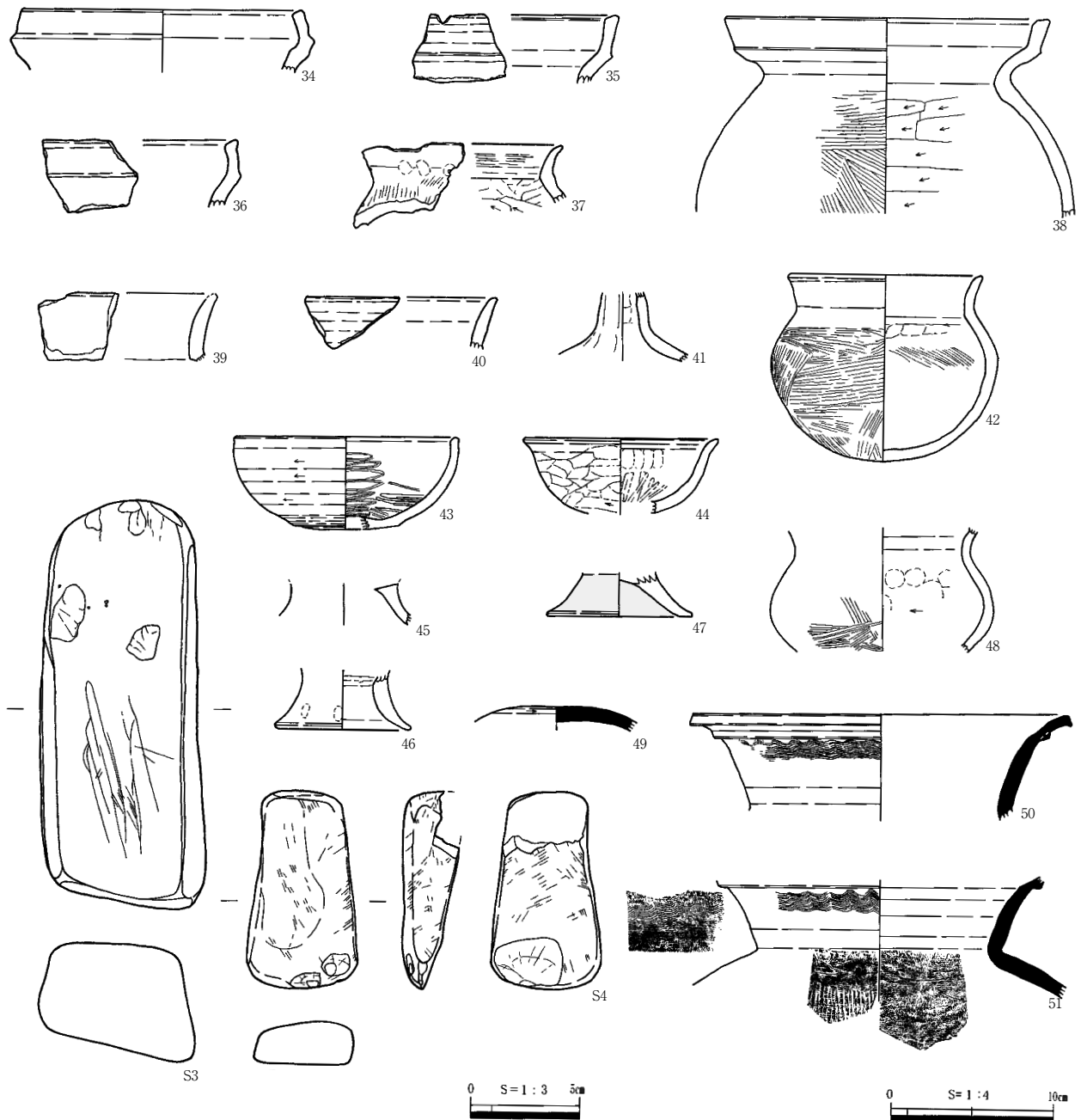
遺構の性格は住居跡と考えるが、いわゆる特殊ピットと間仕切り状の溝の性格は不明である。

SI 3 (第101～103図、PL.92・93・111・112)

調査区の西寄り、E11・E12・F11・F12グリッドにあり、標高73.3～73.6m付近の丘陵緩斜面上に位置する。Ⅱ層除去後のⅢ層中で検出した。西側5.6mにはSI 4が、すぐ東側にはSD 3がある。

平面形はほぼ方形を呈し、検出面での規模は長軸が3.5m、短軸が3.4mを測る。検出面からの深さは最大で36cmであり、床面積は9.5㎡を測る。主軸はN-24°-Wとなる。床面の周囲の壁溝や支柱穴は確認できなかった。

埋土は、黒褐色土または暗褐色土を主体とする自然堆積であり、2～4層では炭粒を少し含んでいた。住居跡の南半分を中心に、しまり・粘性のやや強い褐色土である5層が堆積しており、貼床状に固めてあった。

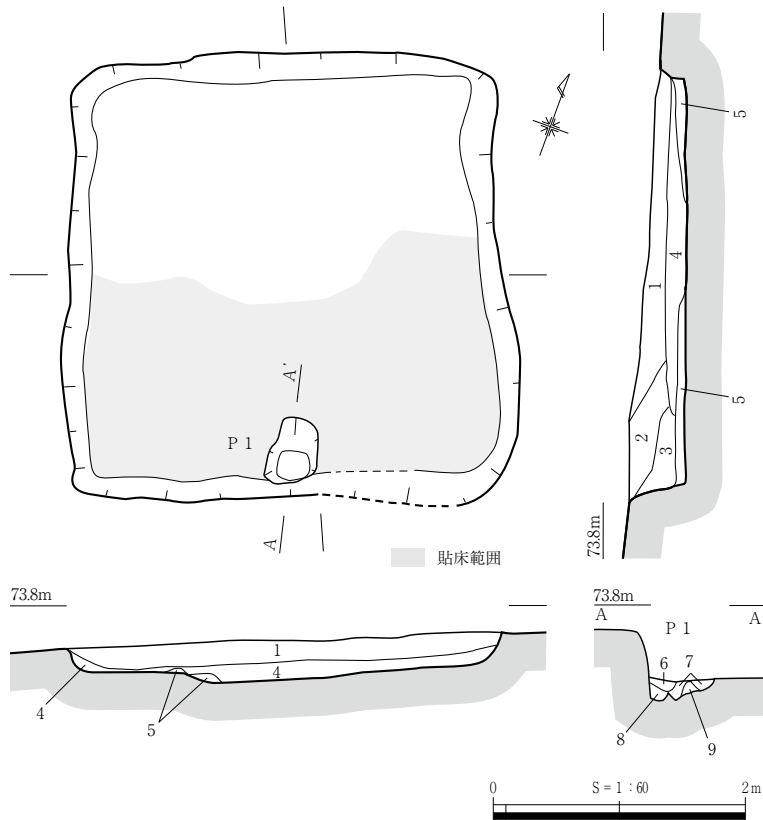


第100図 SI2出土遺物

住居跡の南壁際中央でいわゆる特殊ピット(P1)を検出した。平面は不整な楕円形状を呈し、検出面での規模は長軸が51cm、短軸が40cmであり、検出面からの深さは18cmを測る。特殊ピット内の埋土は、黒褐色土を主体とするが、9層は地山ハードローム由来の褐色土を土手状に盛っている。

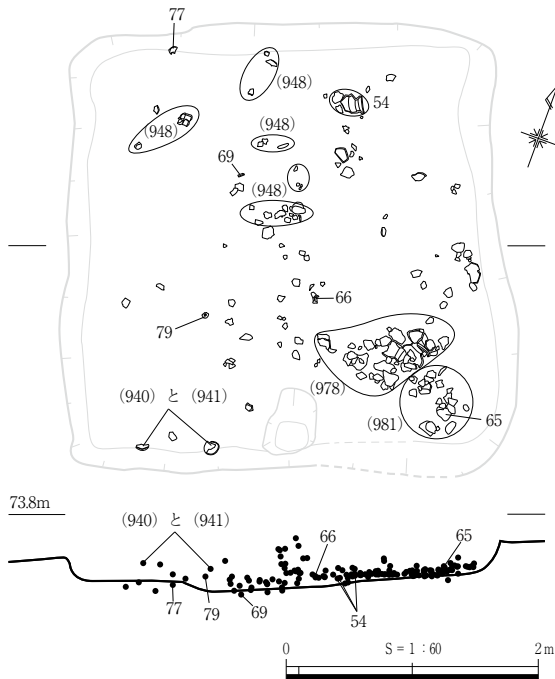
遺物は、埋土中から土師器(52～80)や須恵器(81)が出土した。土師器については、52～57・60・62・65・68・80が複合口縁甕で、58・59・63・70はその他の甕であり、61・64は口縁が外反する埴である。66は壺または甕の底部片で、67は直口壺の口頸部片である。72～74は埴であり、75～77が脚付埴、78・79が高坏のそれぞれ脚部片である。81は須恵器の坏蓋である。

遺構の時期は、須恵器坏蓋が陶邑編年のTK23型式併行期に、土師器が天神川Ⅸ期に比定できることから、古墳時代後期前葉と考える。



1. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱、しまり強
2. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性やや強、しまり強。地山ローム粒をやや密に含む。炭化物を少量含む
3. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性やや弱、しまりやや強。地山ローム粒をやや密に含む。炭化物を微量に含む
4. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性・しまりともに強。地山ロームブロックを多く含む。炭化物を少量含む
5. 褐色土 (10YR4/4) 粘性・しまりともにやや強。地山ロームブロックを密に含む。クロボクがブロック状に混じる。貼床
6. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性・しまりともにやや弱
7. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性やや弱、しまり強。地山ローム粒を多く含む
8. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性やや弱、しまり弱。地山ロームブロックを多く含む
9. 褐色土 (10YR4/4) 粘性やや強、しまり強。地山ハードロームと黒褐色土の混濁土

第101図 SI3 (1)



※数字は、本報告における遺物番号。(数字)は、遺物取り上げ番号。

第102図 SI3 (2)

遺構の性格は住居跡と考えるが、主柱穴が確認できないことや貼床状に固めた床面から、その他の特殊な性格の建物であった可能性もある。また、いわゆる特殊ピットの性格については不明である。

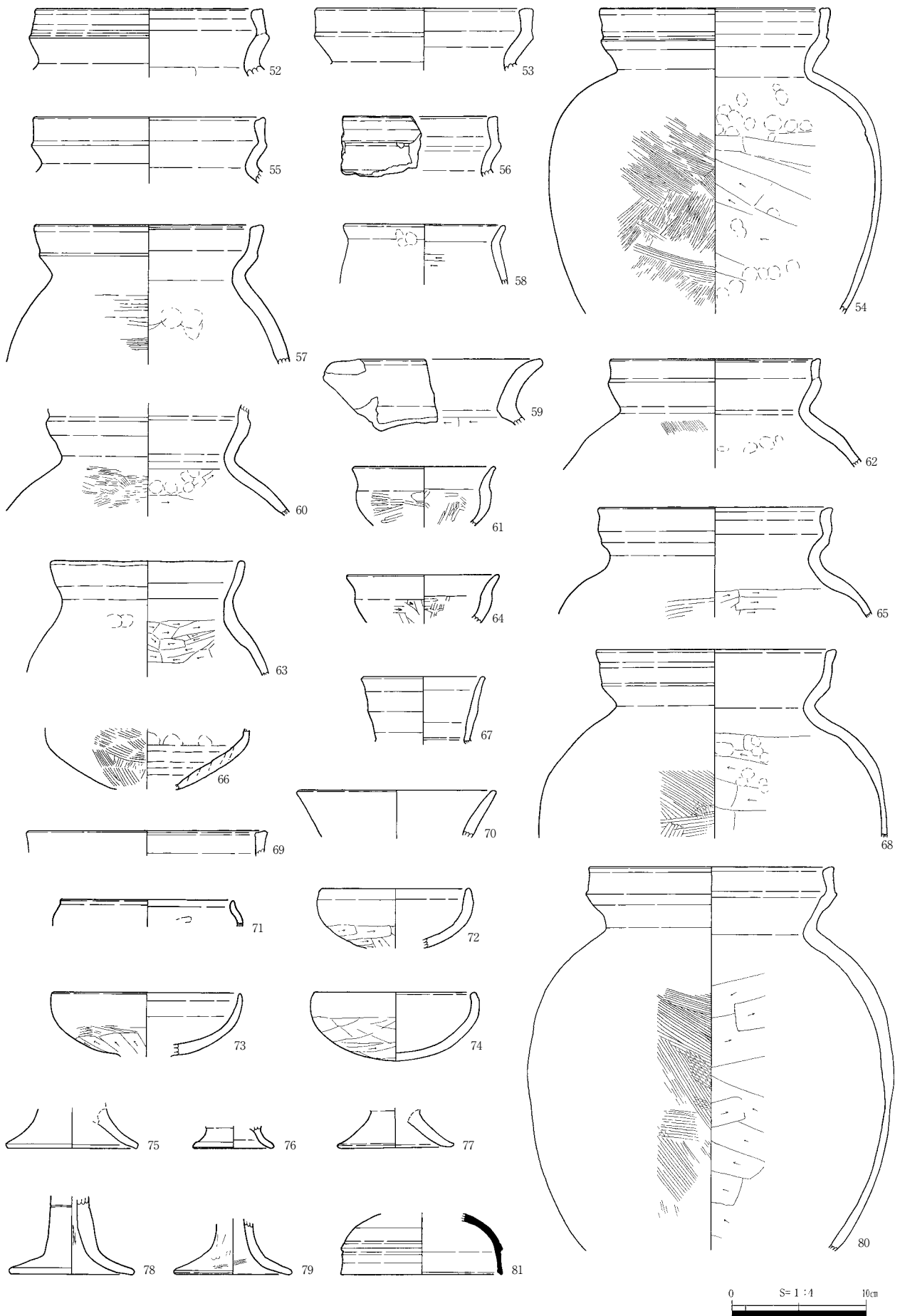
SI4 (第104～108図、表16、PL.94・95・113～115・117・127)

E12・13、F12・13グリッドにあり、標高72.5m～72.7mの緩やかな丘陵傾斜面に位置する。調査区の西端付近にあり、約6m東にはSI3が、さらに東にSI1、SB1、SB3が位置する。西側は谷を挟んで赤坂小丸山遺跡を一望できる。

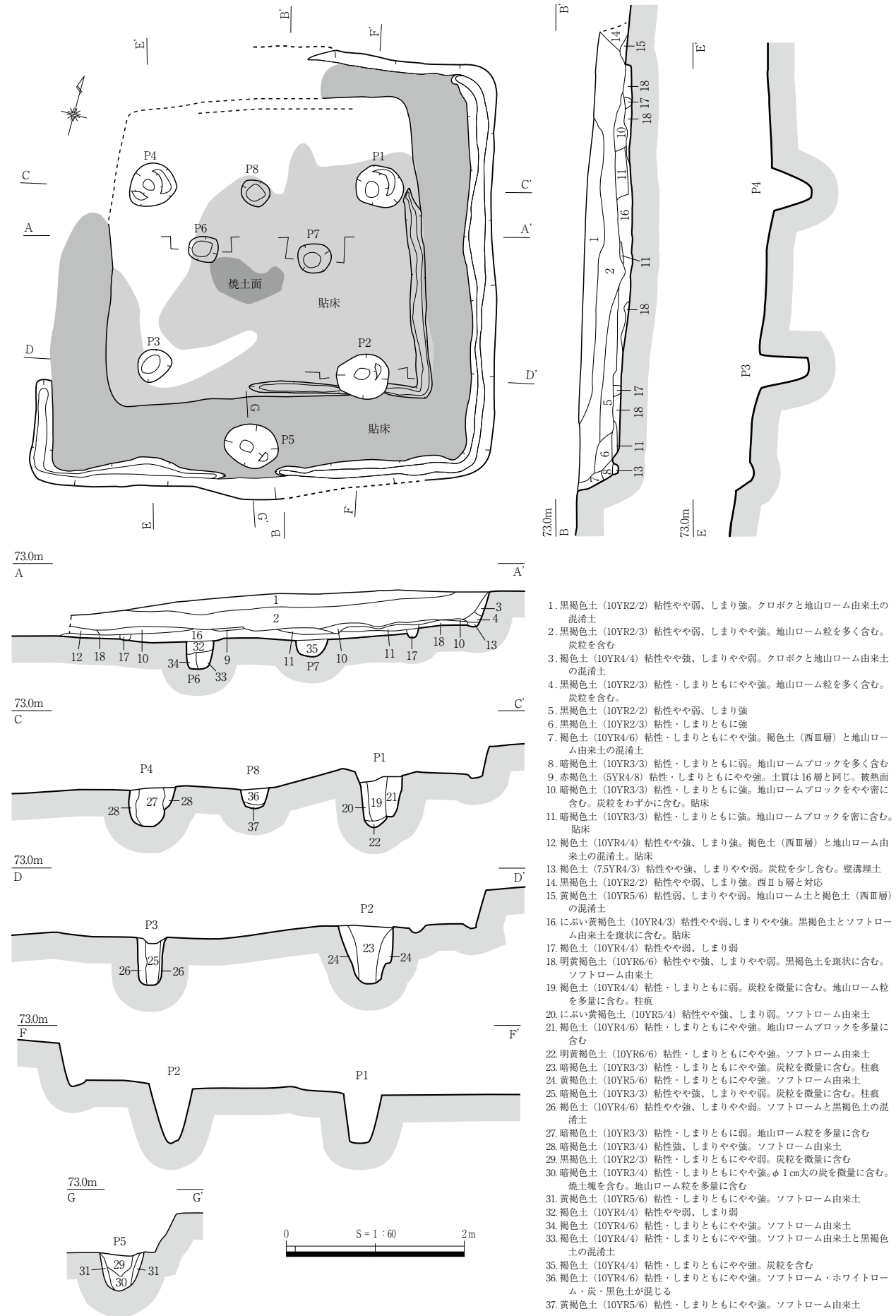
Ⅱ層(西Ⅱ層)除去後のⅢ層(西Ⅲ層)中で検出した竪穴住居跡である。住居跡の東側と南側において壁面と床面、壁溝を検出したが、北西側は残存していなかった。

この部分は、D13～H13グリッド以西にみられた、基本層序の西Ⅲ層の堆積と同時期における地山の流出および攪乱にともない流失したと考える。

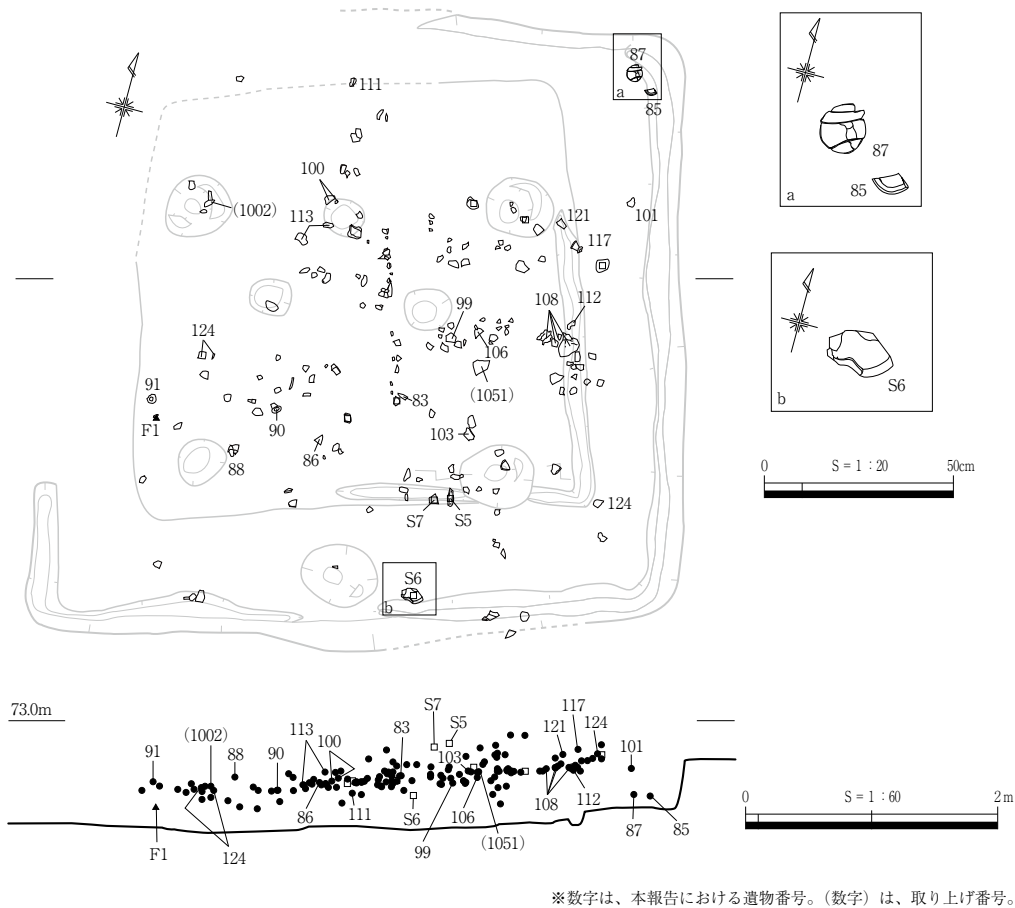
埋土除去後の床面からは、直径40～50cm大のP1～P4と、住居内の南側壁面の中央に隣接するP5の計5基を確認した。また、貼床除去後、壁面から50～70cmほど内側に、一辺2.3m以上の方形に廻ると推定する溝と、さらにその内側にP6～P8の計3基の柱穴を検出した。溝はかつての壁溝と壁面の痕跡であることから、P6～P8をとともなう住居跡がさらに内側にも存在したと考えた。すなわち、P6～P8をとともなう小規模な住居から、P1～P5をととも



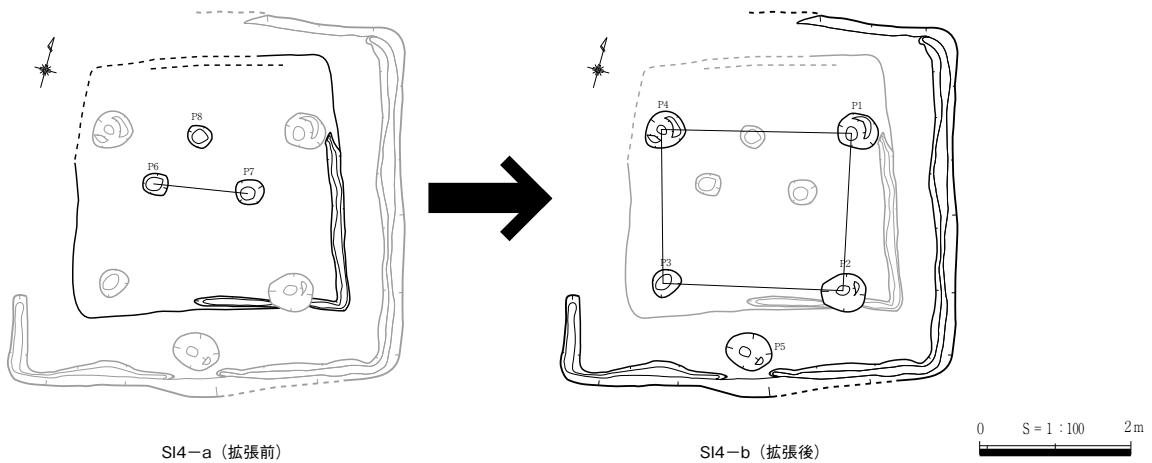
第103図 SI3 出土遺物



第104図 SI4 (1)



第105図 SI4 (2)



第106図 SI4変遷図

なう住居へと建て替えが行われたことを確認した。

以下、先行する小規模な住居跡をSI4-a、後に拡張した住居跡をSI4-bとして報告する。

SI4-a

規模は、東西が3.5m、南北が3.4mで、床面積が11.6㎡に復元できる、平面形が方形を呈する竪穴住居跡である。検出面から床面までの深さは最大で45cmである。壁溝は東側で2.3m、南側で2.0mほど残存するほか、南東隅の部分も残っていた。断面観察から壁溝の痕跡を確認できる部分もあったが、

大半は消滅していた。

床面下の埋土は16・17層であり、16層が貼床層で、17層が壁溝埋土である。貼床は、にぶい黄褐色土と黒褐色土の混漚土で、10cm前後の厚さである。床面は、ソフトローム基盤層(IV層および西IV層)までを掘り込んで形成されており、北西に向かって若干の傾斜がみられるが、貼床の北西部分をやや厚めにするこゝで、水平に補正している。また、住居跡の中央付近でも厚く貼られ、最も厚い部分で26cmとなる。

表16 SI4ピット一覧

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ)cm	備考
P1	52×44-56	柱痕あり(径20cm)
P2	58×52-64	柱痕あり(径20cm)
P3	40×34-52	柱痕あり(径14cm)
P4	50×46-42	
P5	62×50-40	
P6	34×30-32	
P7	36×32-18	
P8	32×30-22	

壁溝は、幅が10cm前後、深さが5cm程度で、断面形がU字形を呈する。基本的には、貼床を掘り込んで壁溝とするが、北側部分のみは地山をそのまま掘り込んでいる。平面観察から、壁溝は四周を廻っていたと考える。

柱穴はP6～P8の3基を検出した。そのうち、P6とP7を主柱穴とする2本柱の建物であったと考える。規模は、径が30～36cmで、深さが18～32cmを測る。主柱穴であるP6-P7間の距離は1.3mを測る。

柱穴の埋土は、いずれも褐色土を主体とし地山ロームのブロックを含むものであった。これは、SI4-bへ建て替える際、柱材を抜き取った後、床面拡張にともなう排土を、柱穴を埋め戻すのに利用した可能性もあろう。

遺物は貼床中から出土しているが、小片のため図化していない。

SI4-b

規模は、東西が5.2m、南北が5.0mで、床面積が23.0㎡に復元できる、平面形が方形を呈する竪穴住居跡である。主軸はN-15°-Wであり、ほぼ建て替え前と主軸を同じくする。

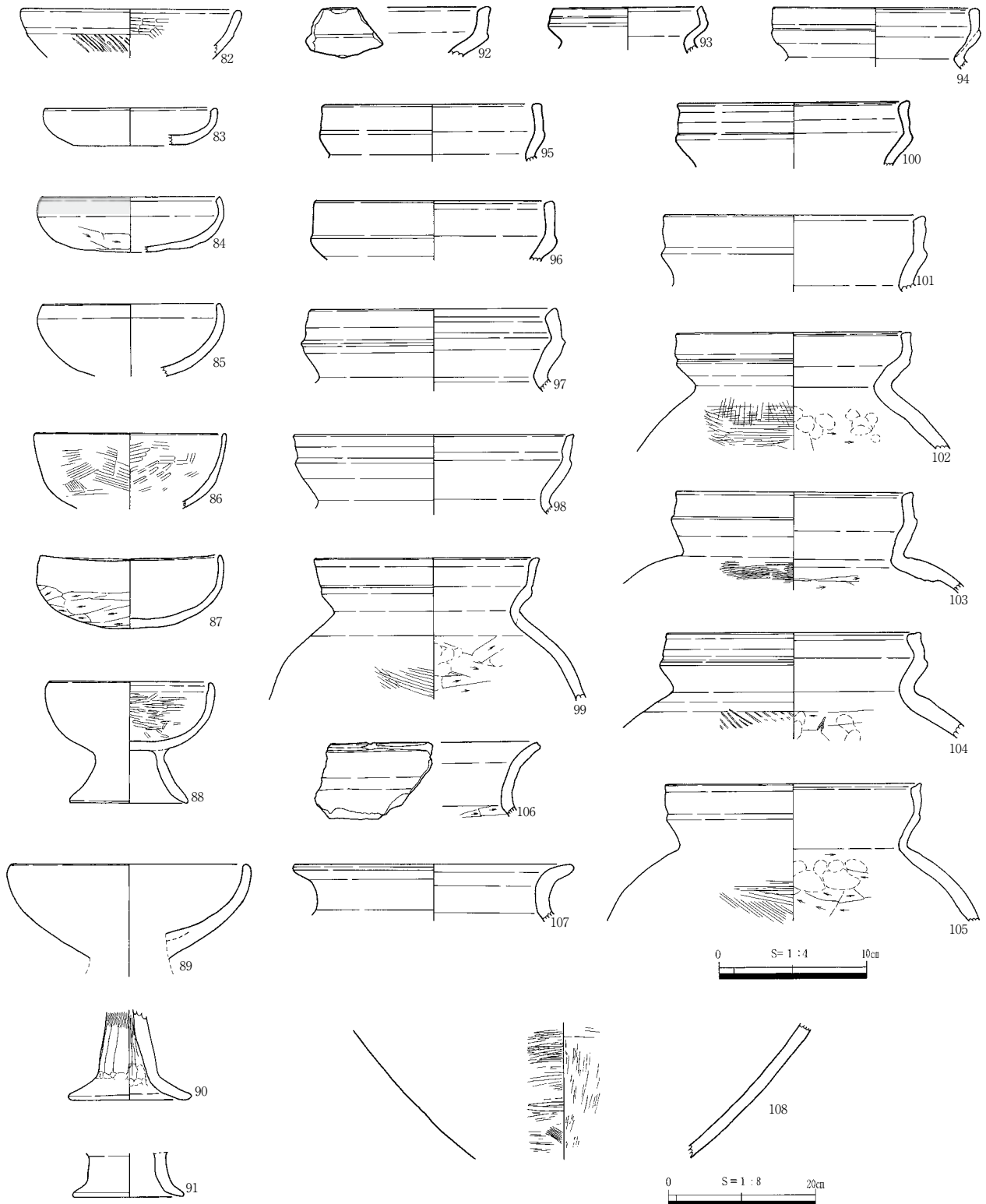
埋土は8層に分けられ、北西側に傾斜しながら自然堆積している。9～11・16層は貼床で、SI4-aの貼床(16層)をそのまま利用するが、10・11層は補修した部分と考える。9層は16層と同質だが被熱しており、平面観察から80×40cmの範囲で、厚さ4cm程度の不整形の焼土面を検出した。

壁溝は、幅が20cm前後、深さが10cm程度で、断面がU字形を呈する。ソフトローム基盤層を掘り込んでおり、貼床によって深さを調節している。平面観察から、壁溝は4周を廻っていたと考える。

柱穴は5基を確認した。そのうちP1～P4を主柱穴とする4本柱の建物であったと考える。主柱穴の規模は、径が34～58cmで、深さが42～64cmを測る。主柱穴間の距離は、P1-P2間が2.1m、P2-P3間が2.4m、P3-P4間が2.0m、P4-P1間が2.5mを測る。P1～P3では、土層観察から柱痕跡が確認でき、そこから柱径は、それぞれ20cm、20cm、14cmに復元できる。

P5は、南壁中央に接して検出しており、いわゆる特殊ピットと考える。埋土中からは炭や焼土塊が出土した。

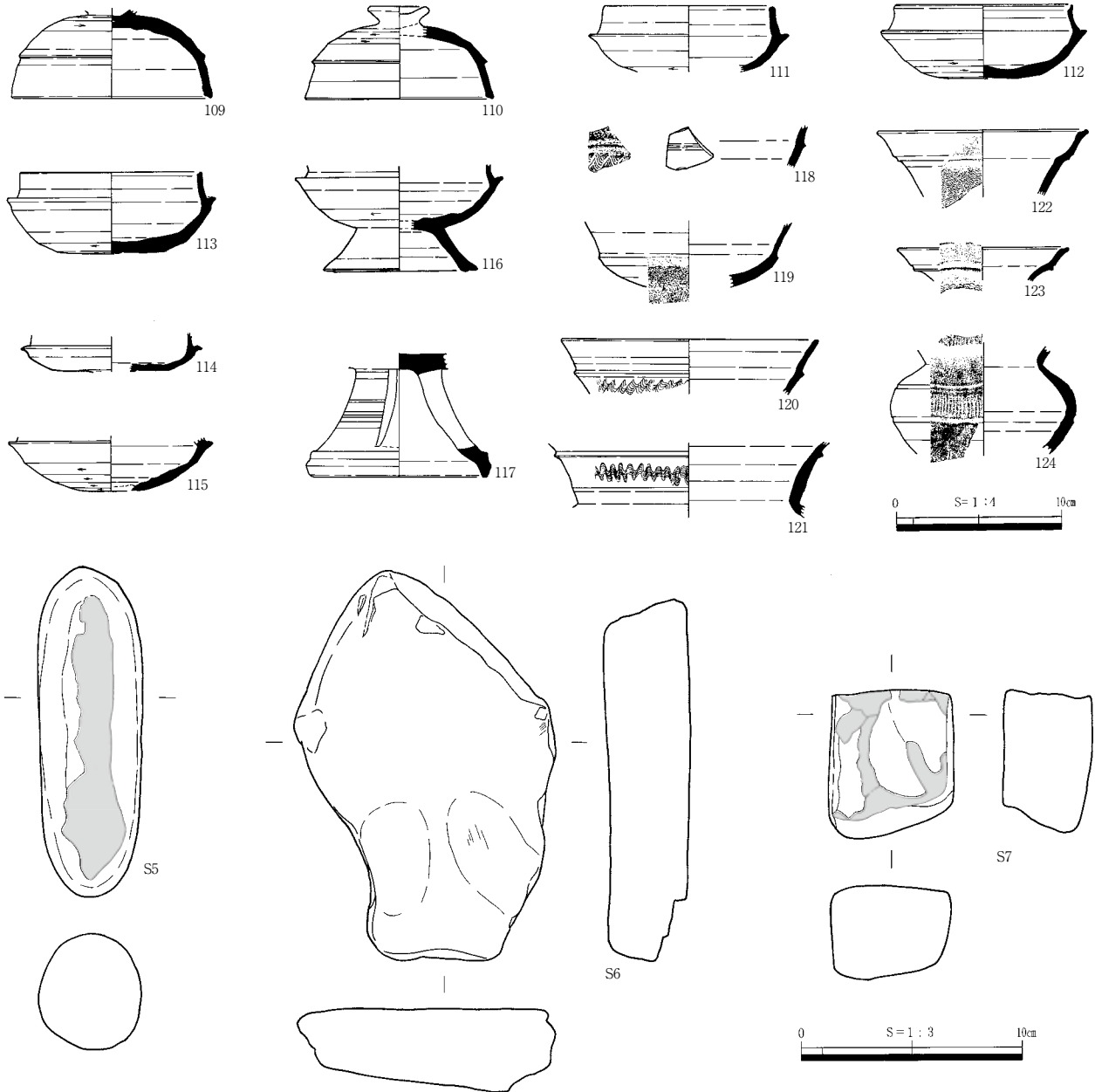
出土遺物は、埋土1層と2層を中心に出土している。82は土師器の高杯で、83～87は土師器の壺である。83・84のような浅い壺と、85～87のような深い壺の2種類がみられる。83～87は、いずれも外面上半をナデ、下半をヘラケズリし、内面をミガキ調整する。82は壺に比べて体部が強く外傾し、外面をハケメ調整する。88は脚付壺で、89は脚付壺もしくは高坏の坏部である。90は高坏の脚部、91



第107図 SI4 出土遺物(1)

は脚付埴の脚部である。92～105は複合口縁甕である。106・107は甕で、口縁が外反する。108は大型甕の底部付近の破片で、内外面に粗いハケメ調整が施されている。時期は、いずれも天神川Ⅸ期併行と考える。

109～124は須恵器である。109・110は有蓋高坏の蓋で、天井部につまみが付く。111～115は坏身



第108図 SI4 出土遺物(2)

である。116～120は高坏である。このうち、116は有蓋高坏、119・120は無蓋高坏である。119・120は、坏部の外面下半に波状文を入れる。117は脚部であり、外面をカキ目調整し、長方形の一段透かしを3方向に入れる。121は甕の頸部であり、外面上部に波状文を入れる。122～124は壘である。122・123は口縁部で、外面には波状文を入れる。124は頸部～胴部片で、頸部に波状文、胴部には刺突文を施す。時期は、陶邑編年のTK23型式～TK47型式併行期と考える。

S5～S7は石器である。S5とS7は磨石で、いずれも灰オリーブ色の光沢をもつ樹脂状のものが一部に付着している。いずれも角閃石安山岩製である。S6は砥石である。

遺構の時期は、出土遺物から古墳時代後期前葉と考える。

SI6 (第109～111図、表17、PL.96・97・116)

E4・E5グリッドにあり、標高71.3～71.4mの丘陵東側緩斜面に位置する。東側は谷を挟み石井垣上河原遺跡を望む。調査区内で検出した住居跡の中では最も東側にある。北へ25mの地点にはSI7が、西に31mの地点にはSB2が位置する。

Ⅱ層除去後のⅢ層上面で検出した、平面形が方形を呈する竪穴住居跡である。

規模は、東西が4.7m、南北が4.9mで、床面積が22.1㎡を測り、検出面からの深さが40～50cmを測る。主軸方向は、N-22°-Wとなる。住居跡の西側は残りがよいが、東側は壁面が流失している。

埋土は5層からなり、黒褐色土または暗褐色土を主体とする。6層は貼床である。各壁面に沿って、幅が10cm前後、深さが5cmほどの断面U字形の壁溝を確認した。壁溝は一部攪乱により失われていたが、4周を廻っていたものと考ええる。

主柱穴は50cm程度の深さをもつP1～P4と、その外側に70cm程度の深さをもつP5～P8がそれぞれ方形に配置されていた。建て替えが行われたと考えるが、主柱穴P1～P4とP5～P8との先後関係が土層断面から確認できず、壁溝は一重にしか確認できなかった。このことから、先行する住居の床面を壁溝底面レベルまで掘削して、新たな住居に建て替えたか、あるいは柱穴を据え替えたのみで、住居自体の拡張は行われなかったと考える。

以下、P1～P4を主柱穴とする住居跡をSI6-a、P5～P8を主柱穴とする住居跡をSI6-bとして報告する。

SI6-a

主柱穴はP1～P4であり、規模は径が29～39cm、深さが40～57cmを測る。各主柱穴間の距離は、P1-P2間が1.7m、P2-P3間が2.0m、P3-P4間が1.9m、P4-P1間が1.8mである。柱穴埋土は、黒褐色土や暗褐色土を主体とし、地山のソフトロームに由来する黄褐色土が多く混ざっている。P1とP2は柱痕を残しており、柱径はそれぞれ15cmと23cmに復元できる。

遺物は、P1より土師器が出土しているが小片のため、図化していない。

SI6-b

主柱穴はP5～P8であり、規模は径が34～42cm、深さが50～72cmを測る。各主柱穴間の距離は、P5-P6間が2.4m、P6-P7間が2.3m、P7-P8間が2.4m、P8-P5間が2.2mを測る。P

5とP7は柱痕を残しており、柱径はそれぞれ10cm、15cmに復元できる。

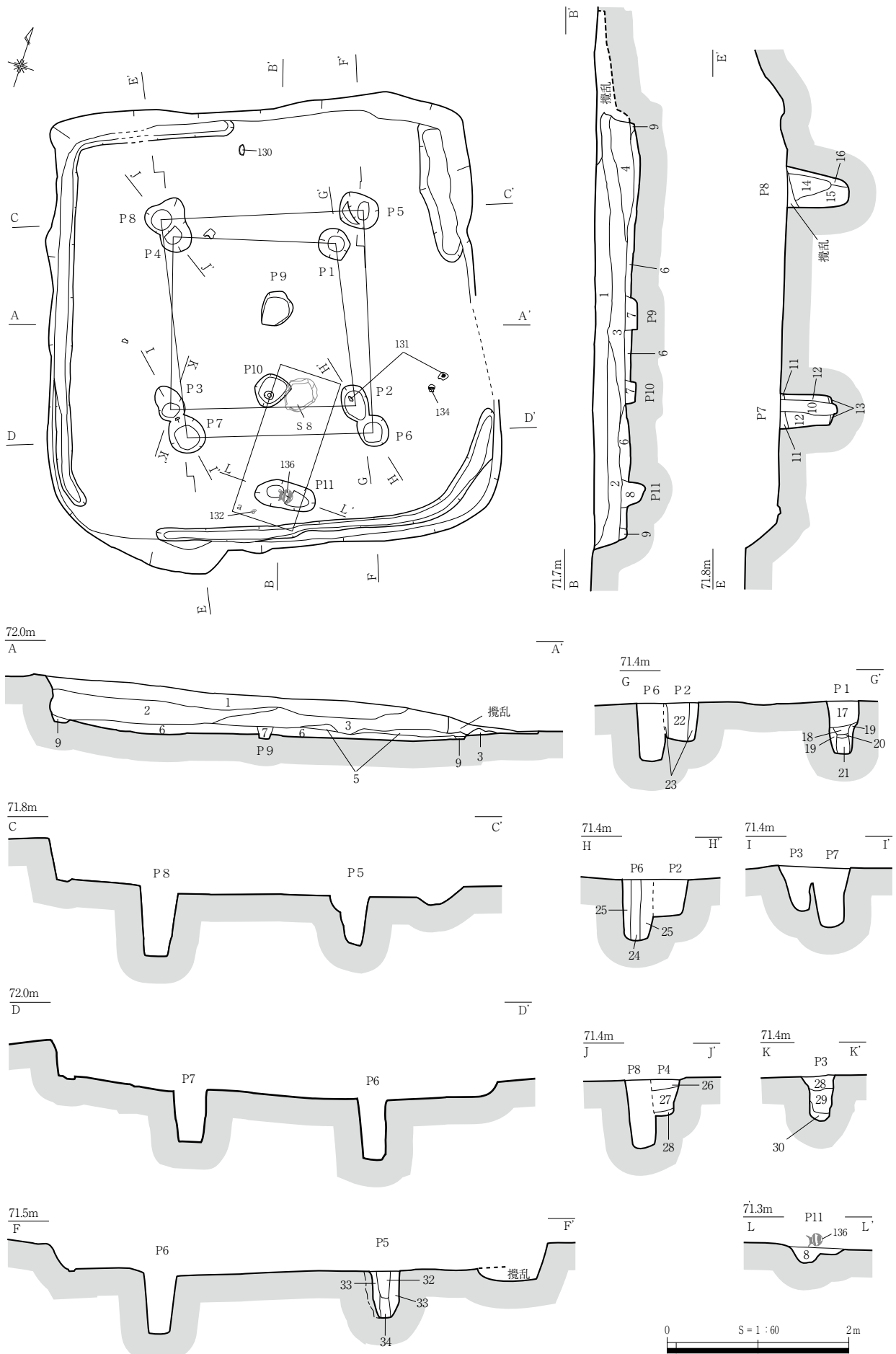
P9とP10は住居跡の中央付近で南北に並んであり、P11は南壁中央付近で検出した。P11はいわゆる特殊ピットの可能性があり、埋土中からは、須恵器の甕が胴部の円孔を下に向け、横倒しの状態で出土した。

遺物は埋土中を中心に出土している。125～127は土師器の甕で、125・126は複合口縁、127は単純口縁の甕である。128・129は埴、

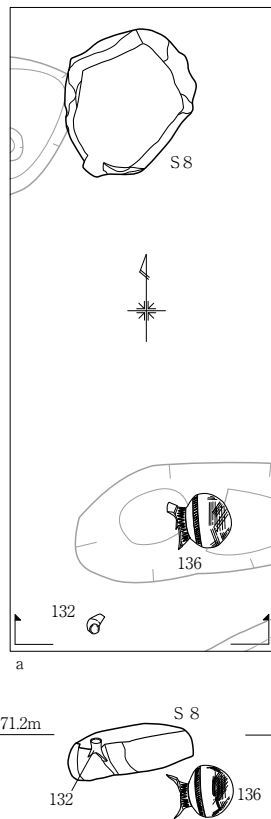
表17 SI6ピット一覧

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ)cm	備考
P1	35×33-57	柱痕あり(径15cm)
P2	40×30-44	柱痕あり(径23cm)
P3	39×29-49	
P4	30以上×35-40	
P5	42×42-50	柱痕あり(径10cm)
P6	34×34-65	
P7	40×40-63	柱痕あり(径15cm)
P8	40×34-72	
P9	48×36-12	
P10	38×30-11	
P11	65×30-25	

※は推定値



第109図 SI6(1)



1. 黒色土 (10YR2/1) 粘性やや弱、しまりやや強。地山ローム粒・細砂を少量含む
2. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性・しまりともにやや強。地山ローム粒・ブロックを多く含む
3. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや弱、しまりやや強。地山ローム粒・ブロックを多く含む
4. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性・しまりともにやや弱。地山ローム粒・ブロックをやや密に含む
5. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性やや強、しまり強。クロボクと地山ローム由来土の混濁土
6. 黄褐色土 (10YR5/6) 粘性やや強、しまり強。黒褐色土と地山ローム由来土の混濁土 (貼床)
7. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性やや強、しまりやや弱。地山ローム粒を含む
8. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性やや強、しまりやや弱。φ~1cm大の地山ローム粒を微量に含む
9. 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性やや弱い、しまり弱。地山ローム粒を含む (壁溝埋土)
10. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや弱、しまり弱。地山ローム粒を多く含む。炭化物を微量に含む
11. 黄褐色土 (10YR5/6) 粘性・しまりともにやや弱。地山ローム由来土 (貼床)
12. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性・しまりともにやや弱。地山ローム粒・ブロックを多く含む。炭化物を微量に含む
13. 黄褐色土 (10YR5/8) 粘性・しまりともにやや強。地山ローム由来土
14. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性・しまりともにやや弱。地山ローム粒を含む
15. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性やや弱、しまりやや強。地山ローム粒を多く含む
16. 黄褐色土 (10YR5/8) 粘性・しまりともにやや強。地山ローム粒を含む
17. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性やや弱、しまり弱。地山ロームブロックを斑に含む
18. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性・しまりともにやや弱。地山ローム粒を含む
19. 褐色土 (10YR4/6) 粘性・しまりともにやや弱。地山ロームブロックを含む
20. 黒色土 (10YR2/1) 粘性やや強、しまり強
21. 黄褐色土 (10YR5/8) 粘性・しまりともにやや弱。地山ローム由来土
22. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性・しまりともにやや弱。地山ロームブロックを含む。炭化物を含む
23. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性・しまりともにやや弱。地山ローム粒・ブロックを多く含む
24. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性やや弱い、しまりやや弱い。φ~2mm大の地山ローム粒と炭を含む
25. 黒褐色土 (10YR3/4) 粘性・しまりともにやや弱い。φ~3mm大の地山ローム粒を含む
26. 褐色土 (10YR4/4) 粘性・しまりともにやや強。地山ロームブロックを多く含む
27. 黄褐色土 (10YR5/4) 粘性・しまりともに強。地山ローム由来土
28. 褐色土 (10YR4/4) 粘性・しまりともに強。炭化物を多く含む
29. 褐色土 (10YR4/6) 粘性やや強、しまりやや弱。貼床土と同質
30. 黄褐色土 (10YR5/8) 粘性やや強、しまりやや弱。ソフトローム由来土・ATブロック・クロボクの混濁土
31. 黄褐色土 (10YR4/3) 粘性・しまりともにやや強。炭化物を含む
32. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性・しまりともに弱。地山ローム粒を含む。炭化物を含む
33. 褐色土 (10YR4/4) 粘性やや弱、しまり弱。地山ローム粒を含む
34. 褐色土 (10YR4/4) 粘性やや強、しまり弱。地山ローム粒・ブロックを含む

第110図 SI6(2)

131・132は高坏、130・133～135は脚付埴である。そのうち、135はP8の埋土中で出土した。

136・137は須恵器である。136はP11の埋土中から出土した須恵器の甕である。ほぼ完形であり、口縁部から頸部にかけて波状文が廻る。胴部には2条の凹線の間には刺突文を施し、その上から円孔を穿つ。また、円孔の下には「十」字形のヘラ記号が施されている。外面底部にはタタキ、内面には同心円文の当て具痕を残している。137は、甕の口縁部片で波状文を施している。

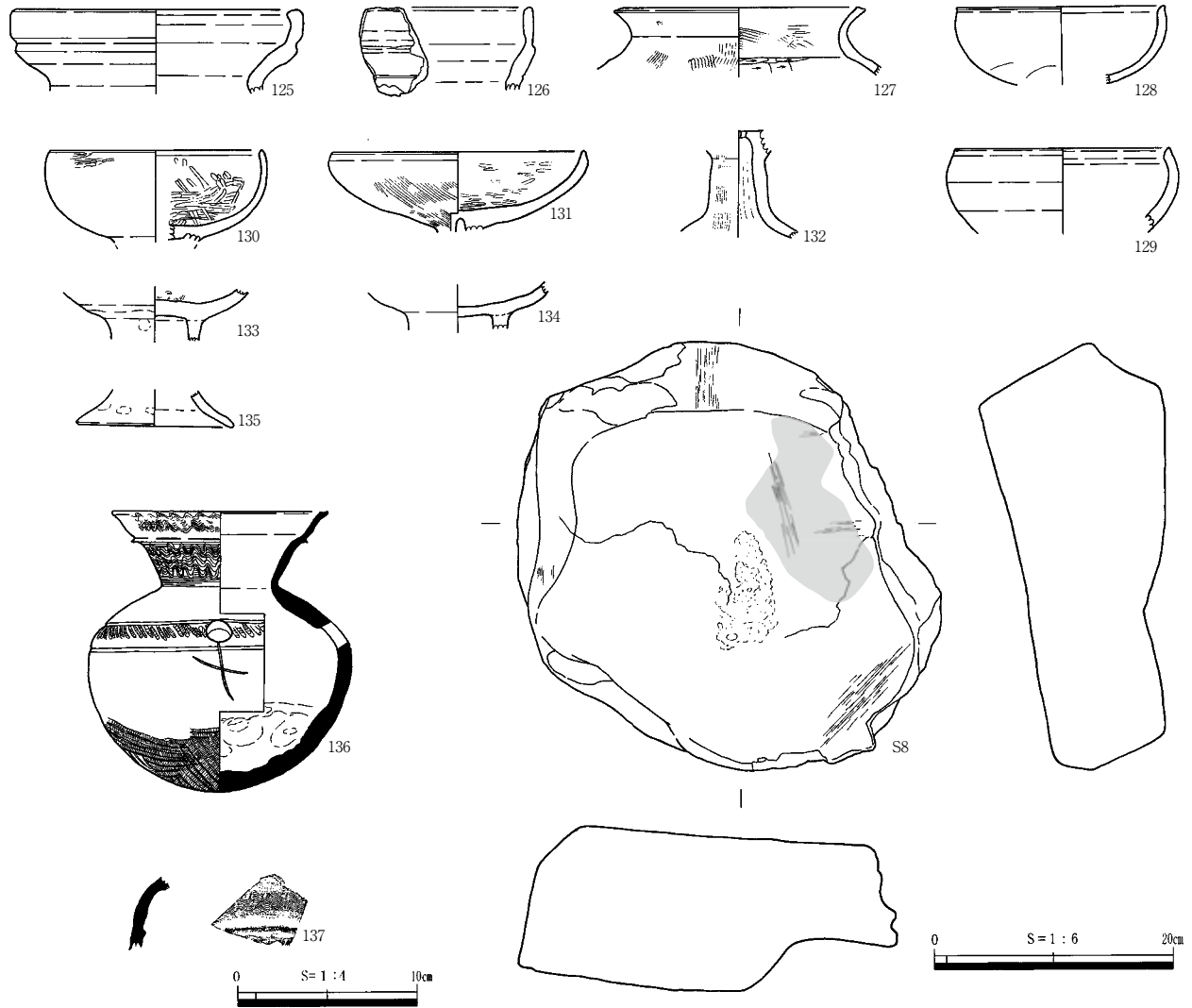
S8は安山岩製の台石で、平面と側面に線状の擦痕がみられる。

遺構の時期は、須恵器が陶邑編年のTK23型式併行期、土師器が天神川Ⅸ期併行に比定できることから、古墳時代後期前葉と考える。また、P5埋土中より水洗選別して得た炭化物について、放射性炭素年代測定を実施した結果、補正年代値 $1610 \pm 20\text{yrBP}$ (IAAA-112685)の測定値を得た。これは、暦年較正年代では405～535calADに比定でき、出土遺物の年代と大きな齟齬はない。

SI7 (第112図、PL.98・116)

調査区の中央より東寄り、C6グリッドの北東隅にあり、標高71.2～71.6mの東側斜面から丘陵上平坦面への傾斜変換線付近に位置する。Ⅱ層除去後のⅢ層中で検出した。南西約16mの位置にピット群1があり、すぐ東側にはSD4がある。竪穴住居跡であるが、北側の大部分は調査区外のため未掘削であり、掘削部分も東側が攪乱で壊されていたため、一部のみを検出できた。

平面形は方形と推定する。残存部分の規模は東西方向が3.0m、南北方向が1.2mであり、検出面からの深さは54cmを測る。床面積は1.7㎡以上となる。主軸はほぼ南北方向と推定する。柱穴や壁溝等は検出できなかった。



第111図 SI6出土遺物

埋土は黒色土または黒褐色土を主体とする5層に分層でき、自然堆積と考える。土層断面の観察より、1層がⅢ層上面から堆積することから、この竪穴住居跡が少なくともこの面より上層から掘り込まれ、実際は平面観察による検出面から床面までの深さより、さらに深くなることが確認できた。

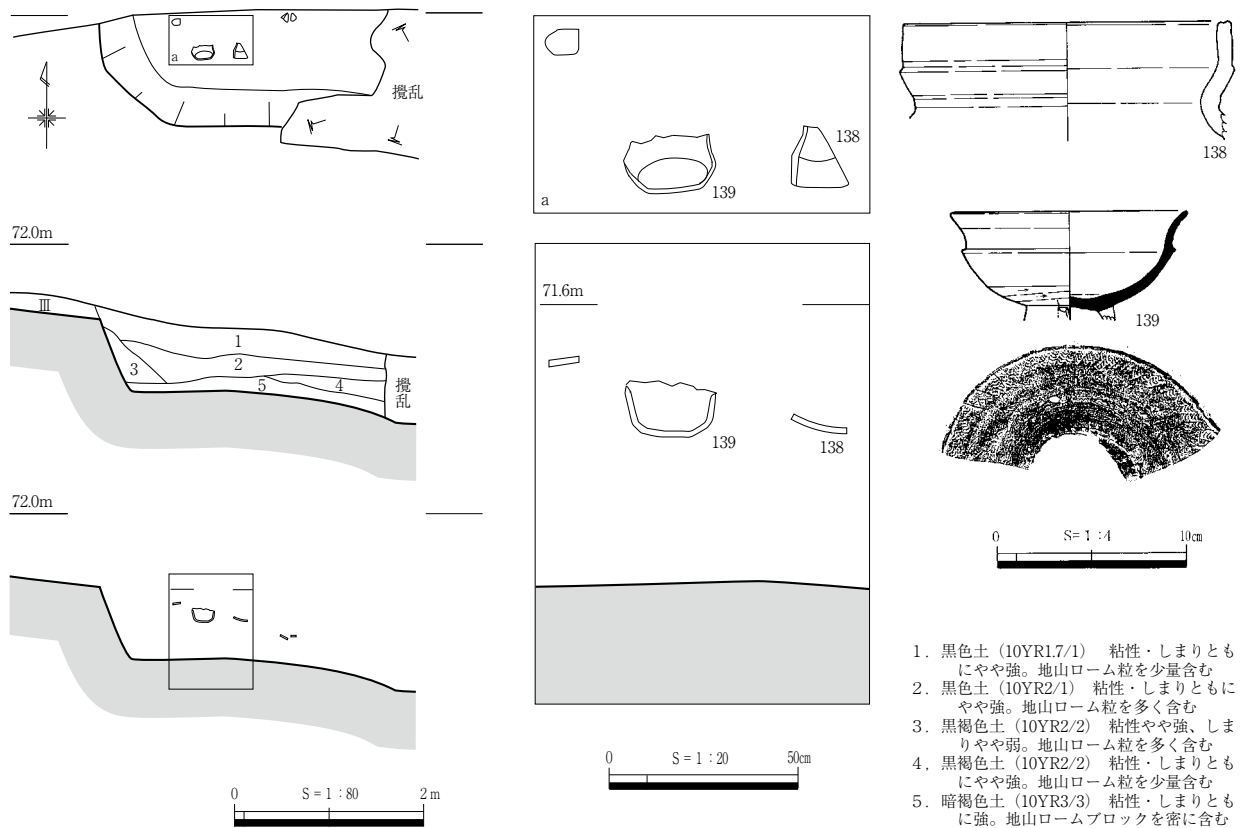
遺物は、埋土中から土師器甕の口縁部片(138)と須恵器高坏の坏部(139)が出土した。139は口縁部が外反し、坏部外面の段の直下に波状文が入る。

遺構の時期は、須恵器が陶邑編年のTK47型式併行、土師器が天神川Ⅸ期併行に比定できることから、古墳時代後期前葉と考える。

3 掘立柱建物跡

SB1 (第113・114図、表18、PL.99・104)

調査区の中央より東寄り、D9・D10・E9・E10グリッドにあり、標高73.0～73.5m付近の丘陵上平坦面に位置する。Ⅱ層除去後のⅢ層中で検出した。北側約8mにはSI2が、南東側約10mにはSI1が位置する。SB3のほか、SK4やSD1が重複する。



第112図 SI7

平面形がほぼ正方形の掘立柱建物跡である。柱穴のうち、P17とP18は、P1～P5およびP9～P13の各柱穴列における中央の柱穴であるP3・P11にそれぞれ対応しており、棟持ち柱の柱穴と考える。このことから、上屋構造は、東西両側面が妻入り側となる、梁行4間(7.5m)×桁行4間(8.0m)の寄棟造の建物と想定できる。主軸はN-19°-Wであり、平面積は60.0㎡を測る。

P19～P21は、他の柱穴に比べて規模が小さいが、P12～P10に対応する形で並んでおり、主柱穴ではないものの、建物跡と関係する何らかの柱の可能性はある。

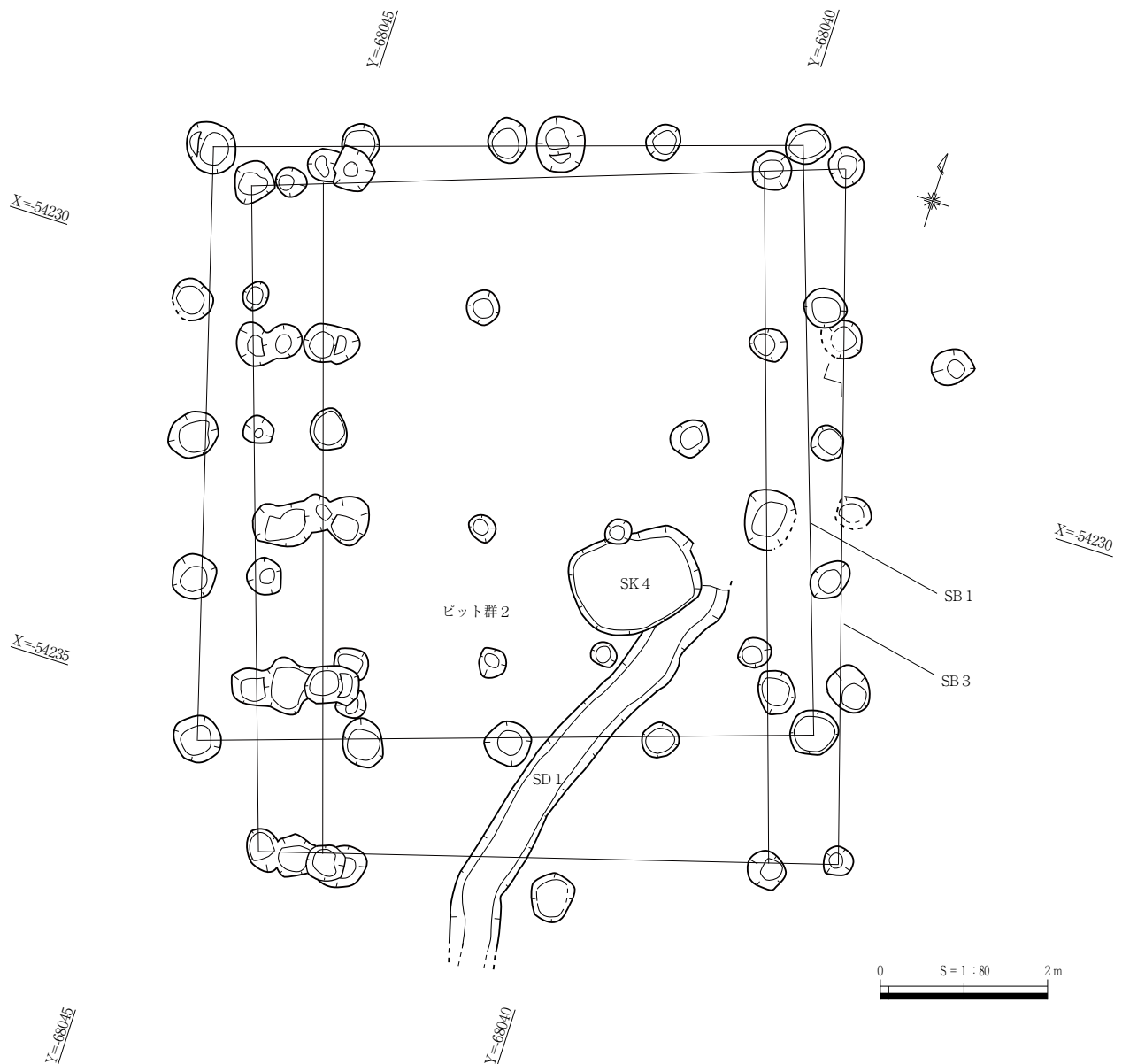
柱穴の規模は、P1～P16が径38～64cm、深さ28～56cmとなり、P17・P18が径40～50cm、深さ40～46cmを測る。P19～P21は径29～44cm、深さ16～60cmを測り、P20が最も深い。

柱穴間距離は、P1～P5ではP1-P2間から時計回りの順に2.0m、1.6m、1.6m、1.8mであり、同様にP5～P9では1.8m、1.8m、1.8m、2.0m、P9～P13では2.0m、1.7m、1.6m、1.8m、P13～P1では1.8m、1.7m、1.9m、1.7mを測る。またP3-P17間は1.6m、P17-P18間は4.3m、P18-P11間は1.6mを測る。さらにP19-P20間は1.7m、P20-P21間は1.7mを測る。

埋土は、主柱穴はいずれも黒褐色土または黒色土を主体とする。P11・P12・P14では柱痕跡が確認できた。柱痕跡から柱の径は、それぞれ24cm、22cm、26cmに推定できる。

遺物は、柱穴内の埋土中から土師器が出土したが、小片のため図化しなかった。

確実な時期を判断できる遺物は出土しなかったが、遺構の時期は、周辺の遺構や埋土の状況から古墳時代後期前葉と考える。なお、P11の埋土27層とP12の埋土32層から採取した炭化物について放射性炭素年代測定を行ったところ、それぞれ補正年代値1600±30yrBP (IAAA-112683)と1590±20yrBP (IAAA-112684)の測定結果を得た。この年代は、いずれも古墳時代中期から後期の年代を示している。



第113図 SB1・SB3・ピット群2・SK4・SD1

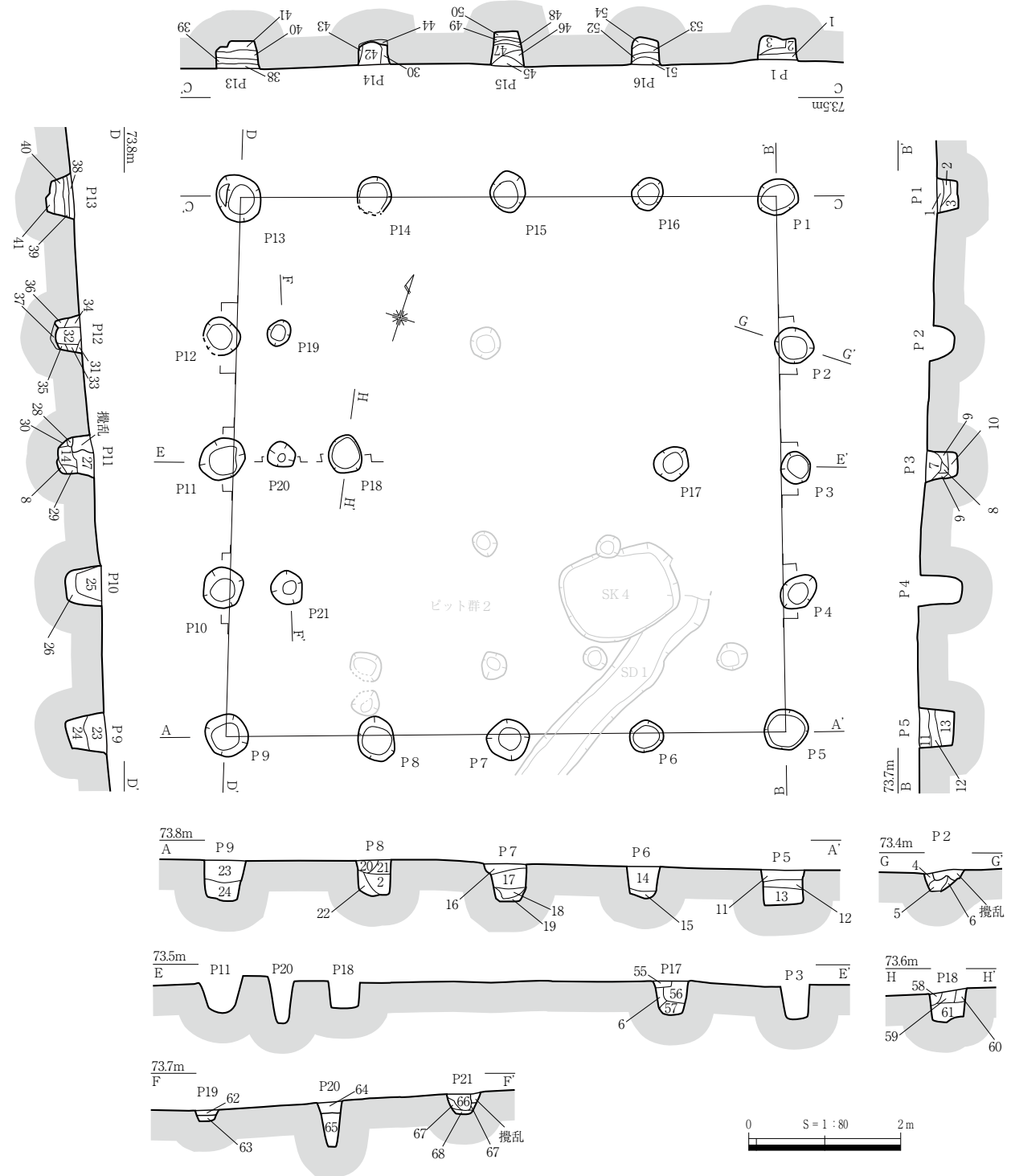
また、P14がSB3のP11-1に壊されることから、SB1→SB3の順で築かれたと考える。

SB2 (第115図、表19、PL.100・104)

調査区の中央、D8・E8・E9グリッドにあり、標高73.3m付近の丘陵上平坦面に位置する。II層除去後のIII層中で検出した。北側約12mの位置にはSB5があり、SB2内の北側柱穴列寄りにはSK5がある。

平面形がほぼ正方形の掘立柱建物跡である。柱穴のうちP17とP18は、P1～P5およびP9～P13の各柱穴列における中央の柱穴であるP3とP11にそれぞれ対応しており、棟持ち柱の柱穴と考える。このことから、SB1と同様、東西両側面が妻側となる、梁行4間(6.4m)×桁行4間(7.0m)の寄棟造の建物に復元できる。主軸はN-8°-Eであり、平面積は44.8㎡を測る。

柱穴の規模は、P1～P16が径33～59cm、深さ33～74cmとなり、P17・P18が径50～60cm、深さ48～58cmを測る。



- | | | |
|--|--|---|
| <p>1. 灰黄褐色土 (10YR4/3) 粘性なし、しまりやや強。クロボクとソフトロームの混濁土。
 2. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや弱、しまり強。クロボクとソフトロームの混濁土。
 3. 黄褐色土 (10YR8/8) 粘性やや弱、しまり強。
 4. 黒色土 (10YR2/1) 粘性やや弱、しまりやや強。地山ローム粒を多く含む。
 5. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性なし、しまり弱。地山ローム粒・ロームブロックをやや密に含む。
 6. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや弱、しまりやや弱。地山ローム粒・ロームブロックを少し含む。
 7. 黒色土 (10YR2/1) 粘性やや弱、しまりやや強。
 8. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや弱、しまりやや強。
 9. 灰黄褐色土 (10YR4/2) 粘性やや強、しまりやや強。クロボクと地山ロームの混濁土。
 10. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱、しまりやや強。地山ロームブロックを多く含む。
 11. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱、しまりやや強。地山ローム粒・ロームブロックを多く含む。
 12. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや強、しまりやや強。クロボクと地山ロームの混濁土。
 13. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱、しまりやや強。地山ローム粒を多く含む。
 14. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱、しまりやや強。地山ローム粒を多く含む。
 15. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや弱、しまりやや強。クロボクと地山ロームの混濁土。
 16. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性なし、しまりやや弱。
 17. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性なし、しまりやや弱。地山ローム粒・ロームブロックを多く含む。炭化物を少し含む。
 18. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性なし、しまりやや強。地山ローム粒を多く含む。
 19. 褐色土 (10YR4/4) 粘性弱、しまりやや強。クロボクと地山ロームの混濁土。
 20. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、しまりやや強。地山ロームブロックを多く含む。
 21. 灰黄褐色土 (10YR5/4) 粘性弱、しまりやや強。クロボクとソフトロームの混濁土。
 22. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱、しまりやや強。クロボクと地山ロームの混濁土。
 23. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性なし、しまりやや強。</p> | <p>24. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、しまりやや弱。クロボクと地山ロームの混濁土。
 25. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性なし、しまりやや強。炭化物をわずかに含む。
 26. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性弱、しまりやや強。地山ローム粒・ロームブロックを多く含む。
 27. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性なし、しまりやや強。炭化物を含む。
 28. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性・しまりともに弱。地山ロームブロックをやや密に含む。
 29. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性なし、しまり弱。地山ロームブロックをやや密に含む。
 30. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性なし、しまり弱。地山ローム粒・ロームブロックを多く含む。
 31. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性・しまりともに弱。地山ローム粒・ロームブロックを多く含む。
 32. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性なし、しまり弱。地山ローム粒を多く含む。炭化物を含む。柱頭あり。
 33. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性・しまりともにやや強。
 34. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、しまりやや弱。地山ローム粒・ロームブロックをやや密に含む。
 35. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性やや弱、しまりやや強。地山ローム粒をやや密に含む。
 36. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性・しまりともに弱。
 37. 黄褐色土 (10YR5/6) 粘性やや強、しまり強。基盤層。
 38. 黒色土 (10YR2/1) 粘性弱、しまりやや弱。地山ロームブロックを多く含む。
 39. 褐色土 (10YR4/4) 粘性・しまりともにやや弱。地山ローム粒をやや密に含む。
 40. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性・しまりともに弱。
 41. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性・しまりともにやや強。地山ロームブロックを多く含む。
 42. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや弱、しまり強。地山ローム粒を多く含む。柱頭あり。
 43. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性なし、しまり強。地山ローム粒・ロームブロックを多く含む。
 44. 黄褐色土 (10YR7/8) 粘性やや弱、しまり強。基盤層。
 45. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性なし、しまり強。</p> | <p>46. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性なし、しまりやや強。地山ローム粒を密に含む。
 47. 明黄褐色土 (10YR6/3) 粘性なし、しまりやや強。クロボクと地山ロームの混濁土。
 48. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性なし、しまり弱。
 49. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性やや強、しまり強。クロボクと地山ロームの混濁土。
 50. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性・しまりともに弱。
 51. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、しまり強。
 52. 暗褐色土 (10YR5/4) 粘性弱、しまり強。クロボクと地山ロームの混濁土。
 53. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性・しまりともにやや強。地山ローム粒を多く含む。
 54. 黄褐色土 (10YR5/6) 粘性弱、しまり強。クロボクと地山ロームの混濁土。
 55. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや弱、しまりやや強。
 56. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや強、しまり強。地山ローム粒を多く含む。
 57. 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性やや強、しまり強。クロボクと地山ロームの混濁土。
 58. 黄褐色土 (10YR5/6) 粘性・しまりともにやや強。クロボクと地山ロームの混濁土。
 59. 黒褐色土 (10YR2/1) 粘性弱、しまりやや弱。
 60. 褐色土 (10YR4/4) 粘性弱、しまりやや弱。クロボクと地山ロームの混濁土。
 61. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性・しまりともにやや弱。
 62. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性弱、しまりやや弱。
 63. 黄褐色土 (10YR5/6) 粘性・しまりともにやや弱。クロボクとソフトロームの混濁土。
 64. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性なし、しまり弱。地山ローム粒・ロームブロックを多く含む。
 65. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性・しまりともに弱。地山ロームブロックを密に含む。
 66. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性・しまりともにやや強。地山ローム粒・ロームブロックを多く含む。
 67. 褐色土 (10YR4/4) 粘性・しまりともにやや弱。クロボクとソフトロームの混濁土。
 68. 明黄褐色土 (10YR6/6) 粘性・しまりともにやや弱。クロボクとソフトロームの混濁土。</p> |
|--|--|---|

第114図 SB1

表18 SB1ピット一覧

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ)cm	備考	ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ)cm	備考
P1	54×47-28		P12	50×※45-36	柱痕あり(径22cm)
P2	52×46-32		P13	64×57-36	
P3	42×40-42		P14	※50×45-32	柱痕あり(径26cm)
P4	55×40-56		P15	55×46-46	
P5	59×55-46		P16	44×38-36	
P6	44×40-44		P17	45×40-46	
P7	57×52-50		P18	50×44-40	
P8	60×47-48		P19	35×29-16	
P9	58×55-54		P20	37×32-60	
P10	55×51-48		P21	44×41-26	
P11	62×53-50	柱痕あり(径24cm)			

※は推定値

表19 SB2ピット一覧

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ)cm	備考	ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ)cm	備考
P1	59×※53-38		P10	44×41-50	
P2	49×39-48		P11	47×33-52	
P3	50×44-74		P12	47×41-50	
P4	46×42-41		P13	39×38-33	
P5	46×45-42		P14	44×40-42	
P6	46×44-46		P15	48×46-46	柱痕あり(径18cm)
P7	39×39-54		P16	44×41-38	
P8	47×45-57	柱痕あり(径16cm)	P17	60×50-58	
P9	50×48-48		P18	59×55-48	柱痕あり(径28cm)

※は推定値

柱穴間距離は、P1～P5ではP1-P2間から時計回りの順に1.6m、1.7m、1.5m、1.6mであり、同様にP5～P9では1.7m、2.1m、1.6m、1.7m、P9～P13では1.7m、1.5m、1.6m、1.7m、P13～P1では1.9m、1.6m、1.7m、1.9mを測る。またP3-P17間は1.7m、P17-P18間は4.0m、P18-P11間は1.6mを測る。

埋土はいずれの柱穴も黒色土および黒褐色土を主体とする。P8・P15・P18で柱痕跡が確認できた。柱痕跡から柱の径はそれぞれ16cm、18cm、28cmと推定できる。

遺物は、P9から須恵器甕胴部片が出土したほか、土師器小片が出土したが図化しなかった。

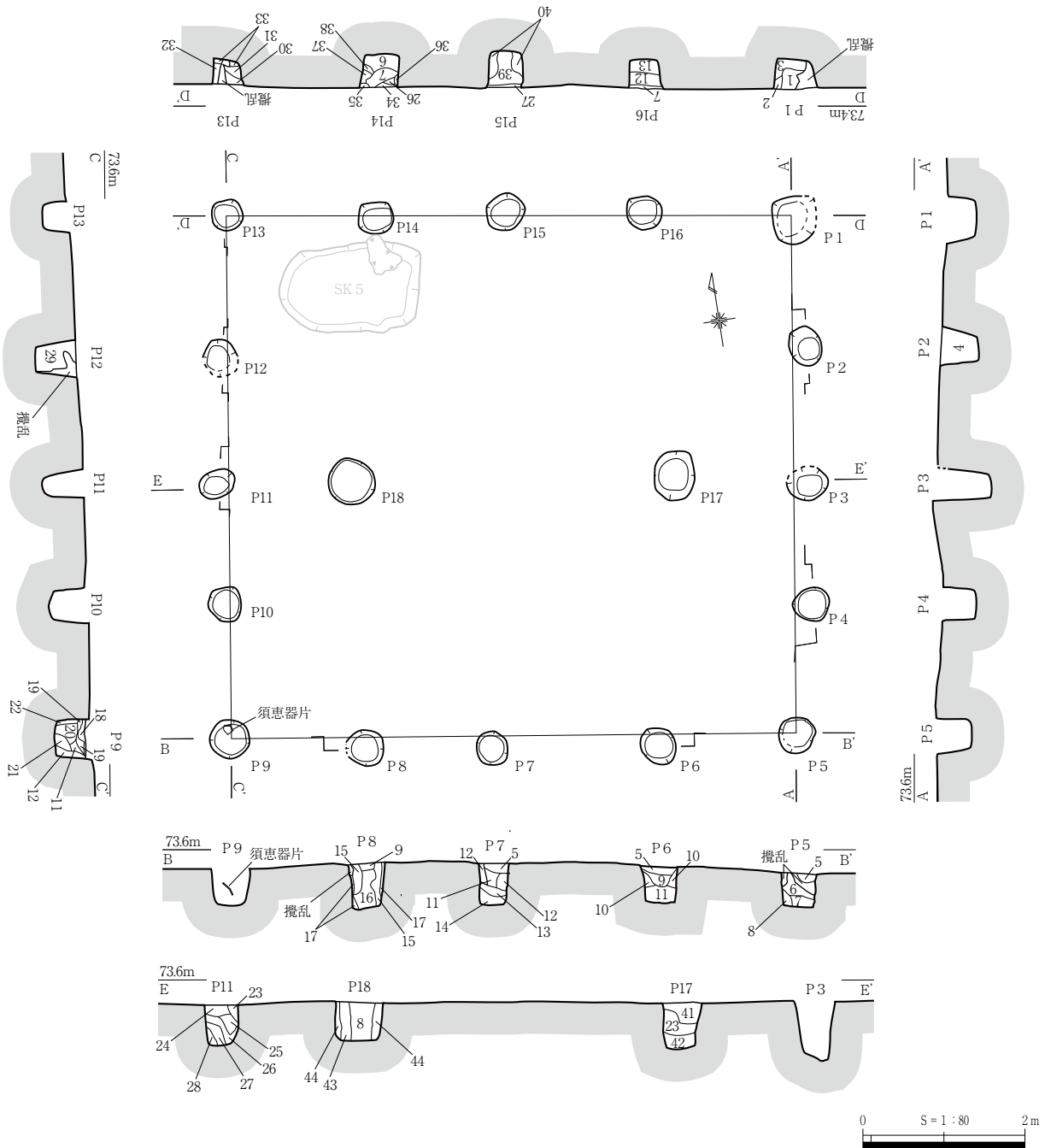
確実な時期を判断できる遺物は出土しなかったが、遺構の時期は、周辺遺構との関係や埋土の状況から、古墳時代後期前葉と考える。

SB3 (第113・116図、表20、PL.101・102・104)

調査区の中央より東寄り、D9・D10・E9・E10グリッドにあり、標高73.0～73.5m付近の丘陵上平坦面に位置する。Ⅱ層除去後のⅢ層中で検出した。北側約8mにはSI2が、南東側約10mにはSI1が位置する。SB1のほか、SK4やSD1が重複する。

平面形が長方形を呈する、梁行2間(5.0m)×桁行4間(8.3m)の掘立柱建物跡である。主軸はN-19°-Wであり、平面積は41.5㎡を測る。

建物の主柱穴はP1～P12であり、西側の主柱穴列のP7～P11では、いずれも2本の柱が重複しており、東側の柱穴を壊して西側に柱を建て替えている。建て替え前の柱穴列をP7-1～P11-1とし、建て替え後の柱穴列をP7-2～P11-2とする。



- | | | |
|--|---|--|
| <p>1. 黒色土 (10YR2/1) 粘性やや強、しまり強。地山ローム粒を多く含む</p> <p>2. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性・しまりともに強。地山ローム粒を多く含む</p> <p>3. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性・しまりともに強。クロボクとソフトローム土の混濁土</p> <p>4. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、しまりやや強。クロボクとソフトローム土の混濁土</p> <p>5. 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性・しまりともに弱。地山ローム粒を微量に含む</p> <p>6. 黒色土 (10YR2/1) 粘性・しまりともに弱。地山ローム粒を少量含む</p> <p>7. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性・しまりともに弱。地山ローム粒・ロームブロックを多く含む</p> <p>8. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性・しまりともにやや弱。地山ローム粒・ロームブロックを多く含む</p> <p>9. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性・しまりともに弱。地山ローム粒を微量に含む</p> <p>10. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性・しまりともに弱。地山ローム粒を多く含む</p> <p>11. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性・しまりともに弱。地山ローム粒を微量に含む</p> <p>12. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性・しまりともに弱。地山ローム粒を多く含む</p> <p>13. 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性弱、しまりやや弱。地山ロームブロックを多く含む</p> <p>14. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性・しまりともにやや弱。φ2cm程度の地山ロームブロックを微量に含む</p> <p>15. 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性弱、しまりやや弱</p> | <p>16. 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性弱、しまりやや弱。φ1~2mm程度の地山ローム粒を多く含む</p> <p>17. 黄褐色土 (10YR5/6) 粘性・しまりともにやや弱。ソフトローム由来土。黒褐色土を微量に含む。壁崩落土</p> <p>18. 明黄褐色土 (10YR6/6) 粘性・しまりともにやや弱。ソフトローム由来土。黒褐色土を含む</p> <p>19. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性・しまりともにやや弱。地山ソフトロームブロックを微量に含む</p> <p>20. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性・しまりともに弱。地山ローム粒・ロームブロックを多く含む</p> <p>21. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性・しまりともにやや弱。地山ローム粒を多く、ロームブロックを微量に含む</p> <p>22. 明黄褐色土 (10YR6/6) 粘性・しまりともにやや弱。ソフトローム由来土。壁崩落土</p> <p>23. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性・しまりともに弱。地山ローム粒を多く含む</p> <p>24. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや弱、しまりやや強。地山ローム粒を多く含む</p> <p>25. 黒色土 (10YR2/1) 粘性・しまりともにやや弱。地山ロームブロックを含む</p> <p>26. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性・しまりともにやや強。地山ローム粒をやや密に含む</p> <p>27. 黒色土 (10YR2/1) 粘性やや弱、しまりやや強。地山ローム粒・ロームブロックを少量含む</p> <p>28. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性・しまりともに弱。地山ローム粒を密に含む</p> <p>29. 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性弱、しまりやや強。地山ローム粒・ロームブロックを多く含む</p> | <p>30. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや弱、しまりやや強。細砂を少し含む</p> <p>31. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性やや弱、しまりやや強。クロボクとソフトローム土の混濁土</p> <p>32. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性なし、しまりやや弱</p> <p>33. 明黄褐色土 (10YR6/8) 粘性やや弱、しまりやや強。ソフトローム由来土</p> <p>4. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性やや弱、しまりやや強。地山ローム粒を多く含む</p> <p>35. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性やや弱、しまり強。地山ローム粒を少量含む</p> <p>36. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性やや弱、しまりやや強。クロボクとソフトローム土の混濁土</p> <p>37. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性弱、しまりやや弱。クロボクとソフトローム土の混濁土</p> <p>38. 明黄褐色土 (10YR6/8) 粘性・しまりともに弱。ソフトロームブロックを密に含む。壁崩落土</p> <p>39. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱、しまりやや弱。地山ローム粒・ロームブロックを多く含む。炭粒を含む。柱痕跡</p> <p>40. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性弱、しまりやや弱。クロボクとソフトローム土の混濁土</p> <p>41. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性・しまりともに弱。地山ローム粒・ロームブロックを多く含む</p> <p>42. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性・しまりともにやや強。地山ロームブロックを多く含む</p> <p>43. 黒色土 (10YR1.7/1) 粘性やや弱、しまりやや強。地山ローム粒を多く含む</p> <p>44. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性・しまりともに弱。クロボクとソフトローム土の混濁土</p> |
|--|---|--|

第115図 SB2

また、建物の東西両側の柱穴列に対応して、それぞれP13～P17と、P18～P22の柱穴列がある。このことから、両面庇付の掘立柱建物跡であったと考える。西側の柱穴列P18～P22は、主柱穴列P7～P11と同様、西側に柱の建て替えがあることから、建て替え前の柱穴列をP18-1～P22-1とし、建て替え後の柱穴列をP18-2～P22-2とする。さらに、両妻側の中央の主柱穴であるP6とP12は、いずれも東西の軸線上から柱一本分程度外側に配置されており、近接棟持ち柱であったと考える。

柱穴の規模は、主柱穴のP1～P12が径38～70cm、深さ50～108cmを測る。東側柱列のP13～P17が径18～57cm、深さ20～36cmを測り、西側柱列のP18～P22が径36～70cm、深さ20～42cmを測る。これらから、主柱穴に比べて東西両柱列の規模は小さい。

柱穴間距離は、P1～P5ではP1-P2間から時計回りの順にいずれも2.1mを測り、同様にP5～P7-2では2.6m、2.8m、P7-2～P11-2では2.1m、2.1m、2.0m、2.2m、P11-2～P1では2.8m、2.5mを測る。また、P13～P17ではP13-P14間から順に2.1m、2.1m、2.2m、2.0mを測り、P18-2～P22-2では1.9m、1.9m、2.2m、1.9mを測る。そして、主柱穴と両側面の柱穴間の距離は、東側で0.9～1.0m程度、西側で0.7～0.8m程度となる。

埋土は、主柱穴はいずれも黒褐色土または黒色土を主体とし、P1・P2・P12はほぼ単層である。P5では柱痕跡が確認でき、柱の径は20cmと推定できる。

確実な時期を判断できる遺物は出土しなかったが、遺構の時期は、周辺の遺構や埋土の状況から古墳時代後期前葉と考える。また、P11-1がSB1のP14を壊すことから、SB1→SB3の順で築かれたと考える。

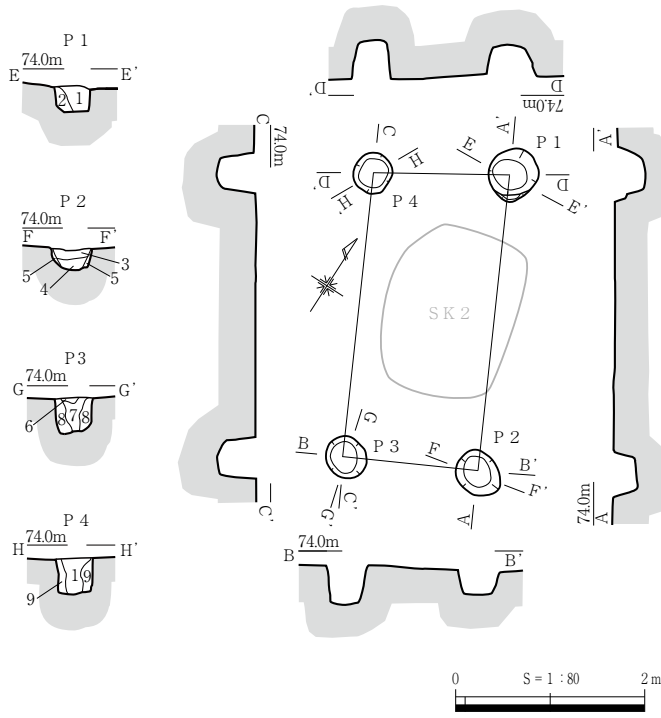
SB4 (第117図、表21、PL.103)

F8グリッドの南西側とG8グリッドの北西側に跨る掘立柱建物跡である。標高73.8m付近の丘陵上平坦部に位置し、SI1の東側に隣接する。II層を除去した後のIII層上面にて検出した。

表20 SB3ピット一覧

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ)cm	備考	ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ)cm	備考
P1	47×45-87		P12	66×60-90	
P2	45×38-95		P13	50×※38-32	
P3	70×58-58		P14	46×26以上-20	
P4	54×44-50		P15	※42×※38-44	
P5	47×42-107	柱痕あり(径20cm)	P16	57×44-46	
P6	58×48-99		P17	20×18-36	
P7-1	46×42-56		P18-1	52×37-42	
P7-2	※48×26以上-86		P18-2	50×※40-40	
P8-1	※46×44-70		P19-1	48×※38-39	
P8-2	※47×20以上-71		P19-2	70×※48-30	
P9-1	44×※38-84		P20-1	44×38以上-33	
P9-2	58×50-108		P20-2	50×?-35	
P10-1	46×※38-77		P21-1	54×36-23	
P10-2	45×26以上-93		P21-2	40×38-20	
P11-1	38×32以上-68		P22-1	56×48-22	
P11-2	54×※49-83		P22-2	36×36-20	

※は推定値



- 1 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性・しまりともに弱。地山ローム粒を含む
- 2 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性・しまりともにやや弱。地山ローム粒を微量に含む
- 3 褐灰色土 (10YR4/1) 粘性・しまりともに弱
- 4 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性やや弱、しまり弱
- 5 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性・しまりともに弱。φ1cm大の地山ローム粒を多量に含む
- 6 褐灰色土 (7.5YR4/1) 粘性・しまりともに弱。炭化物を含む
- 7 黄灰色土 (2.5YR4/1) 粘性・しまりともに弱。地山ローム粒を多量に含む
- 8 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性・しまりともに弱。地山ローム粒を多量に含む
- 9 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性・しまりともに弱。φ3mm以下の地山ローム粒を多量に含む

第117図 SB4

表21 SB4ピット一覧

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ)cm	備考
P1	58×50-28	
P2	52×44-22	
P3	46×40-40	柱痕あり(径10cm)
P4	42×40-38	柱痕あり(径16cm)

規模は、桁行1間(3.0m～3.2m)×梁行1間(1.4m～1.5m)を測り、計4つの柱穴から構成される建物跡である。主軸はN-28°-Wをとる。

各柱穴の平面形は円形状を呈し、規模は径が40～50cmを測るが、深さが20～40cmとばらつきがみられる。

柱穴間の距離は、P1-P2間が3.2m、P2-P3間は1.4m、P3-P4間は3.0m、P4-P1間は1.5mを測る。

柱穴の埋土は黒褐色土を主体とするため、平面からは確認できなかったが、P3とP4の土層断面からは柱痕を確認できた。柱痕から推定する柱の径は、P3が10cm、P4が16cmである。

遺物は出土していないが、周辺の遺構や埋土の状況から、遺構の時期は古墳時代後期前葉と考える。また、SB4内には平面が隅丸長方形の土坑であるSK2が存在しており、SB4にともなう遺構の可能性はある。

SB5 (第118図、表22、PL.103)

調査区中央の北壁沿い、C8グリッドにあり、標高72.5m付近の丘陵上平坦面に位置する。II層除去後のIII層中で検出した。南側約12mの位置にはSB2があるほか、P3はSD2に

よって壊されていた。遺構の北側は調査区外のため、南側の一部を確認したのみだが、北側にも延びると推定する。

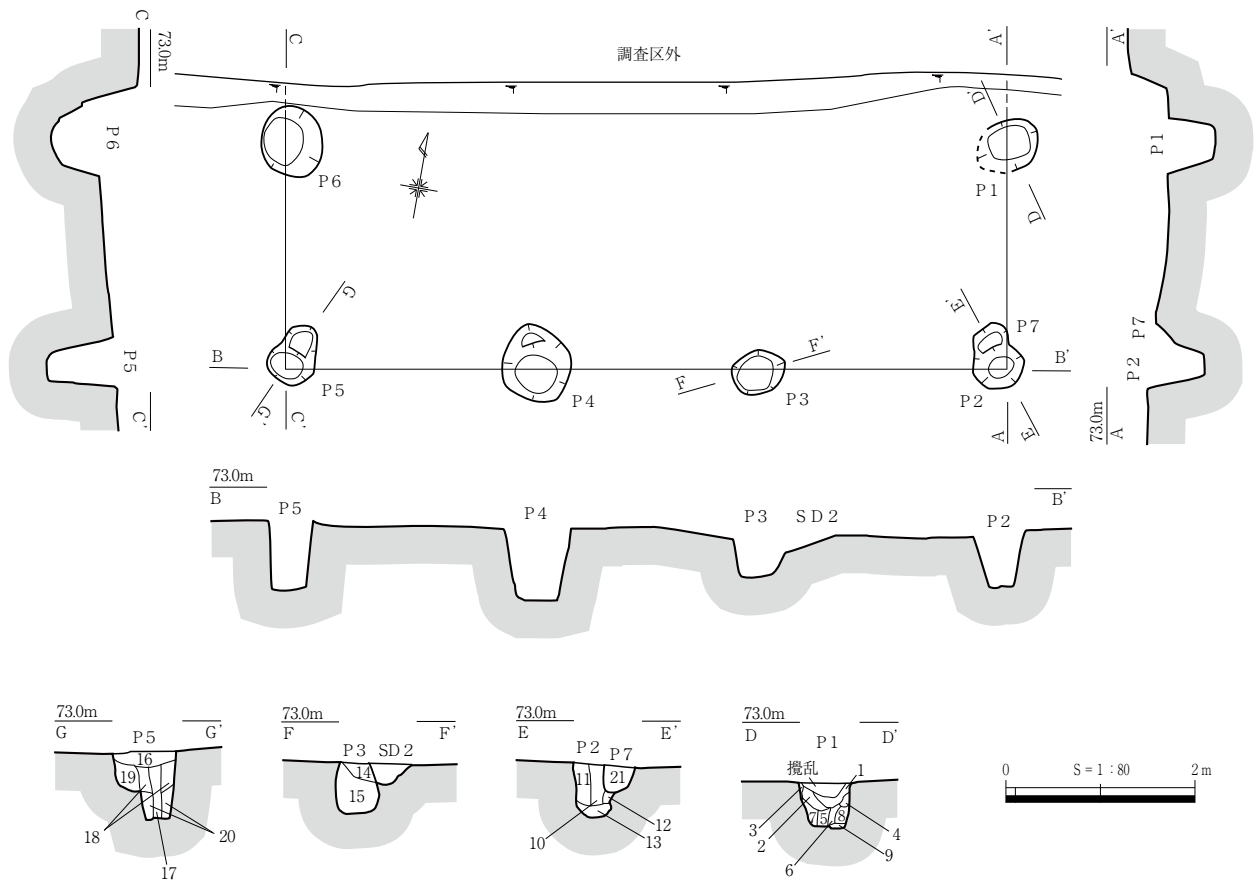
梁と桁の方向を判断できないが、東西3間(7.6m)×南北1間(2.4m)以上となる掘立柱建物跡であり、平面形は方形または長方形となると考える。主軸はN-7°-Wであり、残存する範囲の平面積は18.2㎡である。

柱穴は、7基を確認しており、そのうちP1～P6の6基が支柱穴と考える。規模は径44～84cm、深さ48～76cmで、やや大小のばらつきがある。

柱穴間距離は、P1-P2間から時計回りの順に、2.4m、2.6m、2.4m、2.6m、2.4mを測る。

埋土はいずれも黒褐色土を主体としており、P1・P2・P5では柱痕跡が確認できた。柱痕跡から柱の径はそれぞれ11cm、13cm、10cmと推定できる。

遺物は、ピット埋土中から土器小片が出土したが、小片のため図化しなかった。



1. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性・しまりともに弱。地山ローム粒を多く含む
2. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性・しまりともにやや弱。地山ローム粒をやや密に含む
3. 黄褐色土 (10YR8/6) 粘性・しまりともに弱。ソフトローム土とATの混濁土。壁崩落土
4. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性・しまりともにやや強。クロボクとソフトローム土の混濁土
5. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや弱、しまり弱。地山ローム粒とφ5cm大のロームブロックを含む。柱痕跡
6. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性なし、しまり弱。地山ローム粒を少量含む
7. 黒色土 (10YR2/1) 粘性・しまりともに弱。地山ローム粒を多く含む
8. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性やや弱、しまりやや強。ソフトローム・ATブロックを密に含む
9. におい橙色土 (7.5YR7/4) 粘性やや弱、しまり弱。クロボクとハードローム土の混濁土
10. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性・しまりともに弱。地山ローム粒を多く含む。柱痕跡
11. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性やや弱、しまりやや強。地山ローム粒・ロームブロックをやや密に含む
12. 褐色土 (10YR4/6) 粘性・しまりともにやや強。地山ロームブロックをやや密に含む
13. におい橙色土 (7.5YR6/4) 粘性強、しまり弱。地山ロームブロックを密に含む
14. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性・しまりともにやや弱。地山ローム粒を少量含む
15. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性・しまりともにやや弱。地山ローム粒・ロームブロックを多く含む
16. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性なし、しまりやや弱。地山ローム粒を多く含む
17. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性・しまりともに弱。地山ローム粒を少量含む。柱痕跡
18. 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性やや弱、しまりやや強。地山ローム粒を少量含む
19. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性・しまりともに弱。地山ローム粒をやや密に含む
20. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性なし、しまり弱。φ2~3mmの地山ローム粒を多く含む
21. 黒色土 (10YR2/1) 粘性・しまりともに弱。地山ローム粒を少量含む

第118図 SB5

表22 SB5ピット一覧

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ)cm	備考
P1	※70×54-48	柱痕あり(径11cm)
P2	54×48-56	柱痕あり(径13cm)
P3	56×45-53	
P4	84×72-76	
P5	51×44-71	柱痕あり(径10cm)
P6	75×66-52	
P7	39×24以上-27	

※は推定値

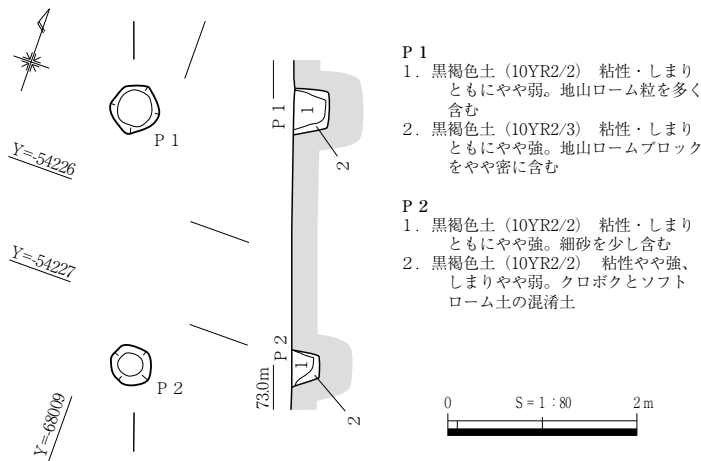
確実な時期を判断できる遺物は出土しなかったが、遺構の時期は、埋土の状況や周辺遺構との関係から古墳時代後期前葉と考える。

4 ピット群

ピット群1(第119図、表23)

調査区の中央より東寄り、D6グリッドの西端にあり、標高72.8m付近の丘陵上平坦面に位置する。II層除去後のIII層中で検出した。北東約16mの位置にはSI7がある。

2基のピットからなり、P1とP2は列をなす可能性もあるが、周囲に関係する他のピットが存在せず、確実なことはいえないため、ピット群としてまとめた。検出面での平面形はP1が径約50cm、



第119図 ピット群1

表23 ピット群1ピット一覧

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ)cm	備考
P1	52×49-36	
P2	46×41-29	

北側約8mにはSI2が、南東側約10mにはSI1が位置する。SB1・SB3・SK4・SD1と重複する。

9基のピットからなり、そのうちP5～P8は列をなす可能性があるが、確実ではないため、ピット群2として報告する。P5～P8の径は28～42cmで、深さは26～34cmを測る。P5～P8が列をなす場合、主軸はN-70°-Eとなる。

埋土は、いずれも黒褐色土または黒色土を主体とする。P6では柱痕を残しており、柱径は12cmと推定できる。

確実な時期を判断できる遺物は出土しなかったが、遺構の時期は、埋土の状況や周辺遺構との関係から古墳時代後期前葉と考える。

遺構の性格は不明であるが、P1を除くピットは、SB1に伴う可能性がある。

5 土坑

SK2 (第121図、PL.103・105)

調査区中央の南寄り、F8グリッドの南西隅にあり、標高73.8m付近の丘陵上平坦面に位置する。切り合い関係はないが、重複してSB4がある。II層除去後のIII層中で検出した。

平面形は隅丸長方形を呈し、検出面での長軸は1.76m、短軸は1.56mであり、検出面から底面までの深さは中央で21cm、西側で26cmを測る。底面は平坦で、壁はやや外傾しながら立ち上がり、断面逆台形状を呈する。底面積は2.1㎡であり、主軸はN-14°-Wである。

埋土は、黒褐色土の単層であり、しまりが強く、地山ローム粒やロームブロックをやや密に含む。

遺物は出土していないが、埋土の状況や周辺遺構との関係から、遺構の時期は古墳時代後期前葉と考える。遺構の性格は不明であるが、SB4と関係する土坑の可能性はある。

P2が径約45cmであり、深さはP1が36cm、P2が29cmを測る。

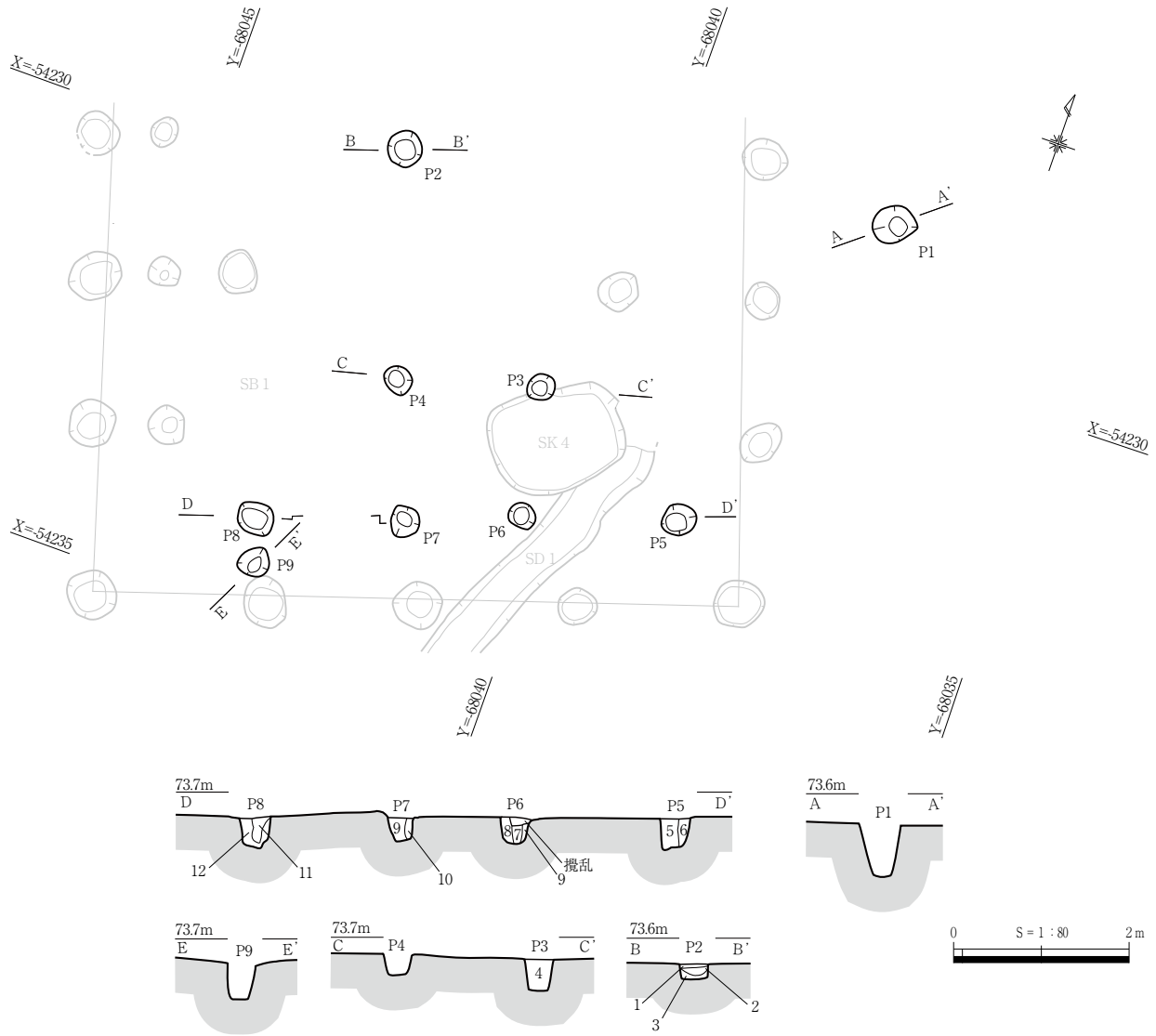
埋土はいずれも黒褐色土を主体とする2層に分層できる。

遺物は、ピット埋土中から土器小片が出土したが、小片のため図化しなかった。

確実な時期を判断できる遺物は出土しなかったが、遺構の時期は、埋土の状況や周辺遺構との関係から古墳時代後期前葉と考える。

ピット群2 (第120図、表24、PL.99)

調査区の中央より西寄り、D9・D10・E9・E10グリッドにあり、標高73.0～73.5m付近の丘陵上平坦面に位置する。II層除去後のIII層中で検出した。



1. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性なし、しまり弱
2. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性やや弱、しまりやや強
3. 褐色土 (10YR4/4) 粘性やや強、しまり強。ソフトロームとクロボクの混濁土
4. 黒色土 (10YR2/1) 粘性なし、しまりやや弱
5. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱、しまりやや弱。地山ローム粒を多く含む。柱痕
6. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性なし、しまり弱。ソフトロームとクロボクの混濁土
7. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱、しまりやや弱。地山ロームブロックを少し含む。柱痕
8. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性・しまりともにやや強。地山ローム粒をやや密に含む
9. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや弱、しまりやや強。地山ローム粒をやや密に含む
10. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性やや弱、しまりやや強。地山ローム粒をやや密に含む
11. 黒色土 (10YR2/1) 粘性・しまりともにやや強。地山ローム粒を多く含む
12. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性・しまりともにやや強。地山ローム粒・ロームブロックをやや密に含む

第120図 ピット群2

表24 ピット群2ピット一覧

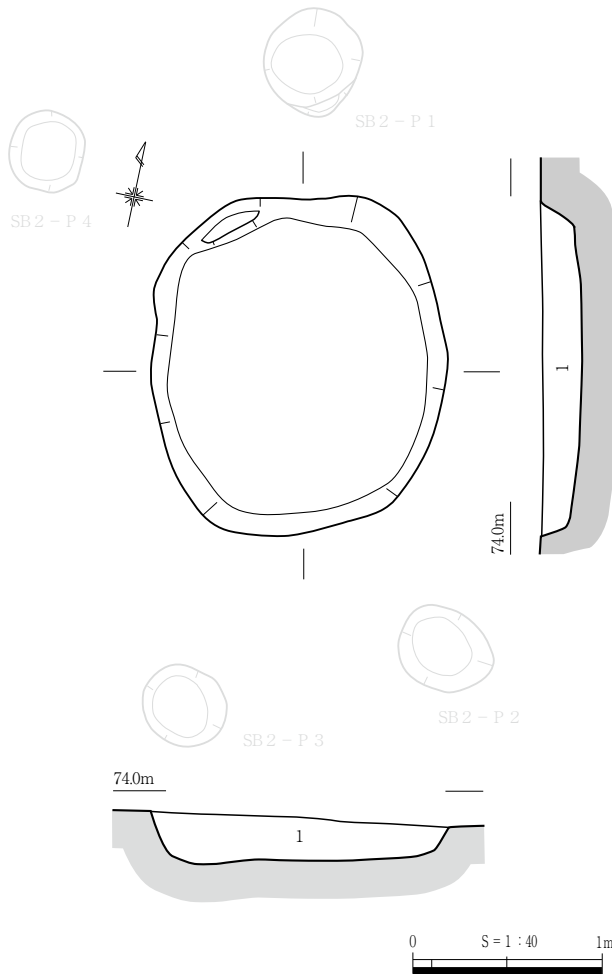
ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ)cm	備考
P1	48×39-60	
P2	42×38-18	
P3	34×30-36	
P4	34×28-24	
P5	42×36-32	
P6	32×28-32	柱痕あり(径12cm)
P7	36×32-26	
P8	42×36-34	
P9	36×32-40	

※は推定値

SK 3 (第122図、PL.105)

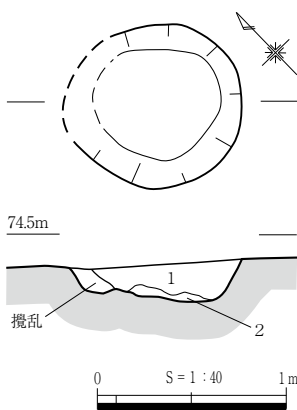
調査区中央の南寄り、G10グリッドの北東隅にあり、標高74.3m付近の丘陵上平坦面に位置する。北東側約4mにSI1が、南東側約4mにSK7がある。II層除去後のIII層中で検出した。

北西部分は一部攪乱のため壊れるが、平面形は円形を呈しており、検出面での直径は北東-南西方向で86cm、検出面から床面までの



1. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性やや弱、しまり強。地山ローム粒・ロームブロックをやや密に含む。細砂を多く含む

第121図 SK2



1. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱、しまり強。地山ローム粒を多く含む
2. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性・しまりやや強。地山ロームブロックをやや密に含む

第122図 SK3

深さは21cmを測る。底面は平坦で、壁はやや外傾して立ち上がり、断面逆台形状を呈する。床面積は0.27㎡である。

埋土は黒褐色土を主体とする2層に分層でき、しまりが強く、地山ローム粒やロームブロックを含んでいた。

遺物は出土していないが、埋土の状況や周辺遺構との関係から、遺構の時期は古墳時代後期前葉と考える。遺構の性格は不明である。

SK4 (第123・124図、PL.99・105・118)

E9グリッドとE10グリッドに跨り、標高73.5mの丘陵上平坦部に位置する。長軸1.58m、短軸1.15m、深さ40cmを測る平面形が隅丸長形状の土坑で、平成22年度の確認調査時に確認したTr.12のSK1に相当する。遺構の南東隅はSD1に掘りこまれ、遺構の上面を一部破壊されていた。

埋土は4層に分けることができ、黒褐色土を主体とする。各層に遺物を確認しており、とくに遺構内西側の4層を中心に、土師器甕1個体分(140)を確認した。

出土遺物のほか、周辺遺構との関係や埋土の状況から、遺構の時期は古墳時代後期前葉と考える。

SK5 (第125・126図、PL.100・105・117)

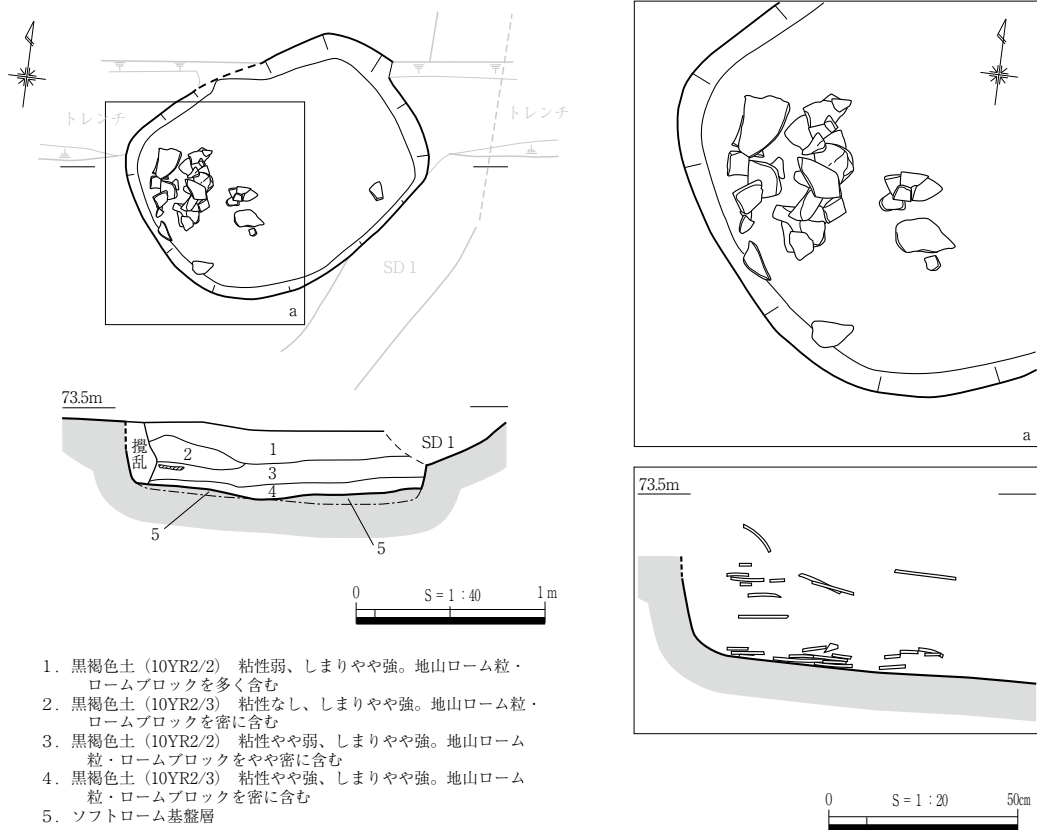
E8グリッドの南西隅、標高73.0m～73.1mの丘陵上平坦部に位置する。SB2内にて検出しており、SB2-P14に隣接する。

遺構の規模は、長軸が1.72m、短軸が1.10m、深さが20cmを測り、平面形は隅丸長形状を呈する。埋土は、1層の黒褐色土と2層の暗褐色土に分けることができ、クロボク由来の土を主体とする。

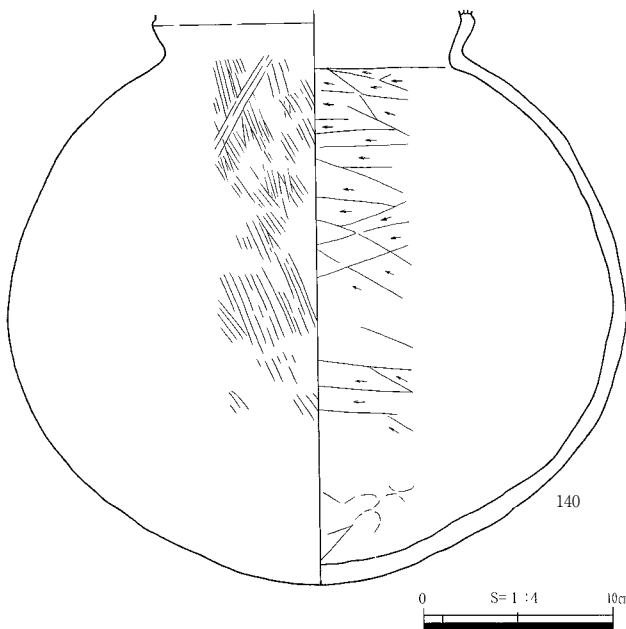
遺物はすべて埋土1層より出土している。141は土師器の複合口縁甕であり、142は土師器の甕で、口縁部が外反する。143は須恵器の坏蓋である。

遺構の時期は、土師器が天神川Ⅸ期併行に、須恵器が陶邑編年のTK47型式併行期に比定できることから、古墳時代後期前葉と考える。

遺構の性格は不明であるが、SB2と関係する可能性がある。



第123図 SK4



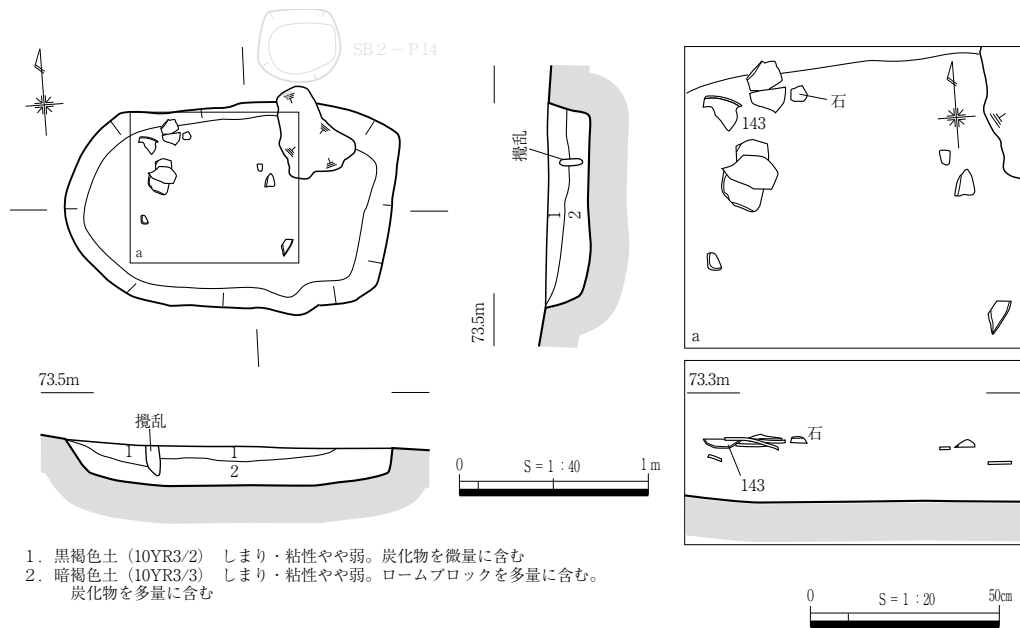
第124図 SK4 出土遺物

SK6 (第127・128図、PL.106・117・118)

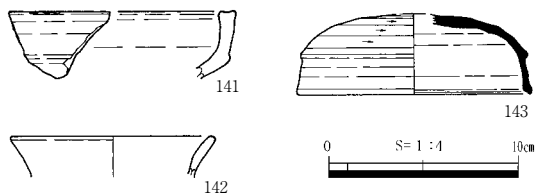
調査区の中央、E10グリッドの南東隅にあり、標高73.8m付近の丘陵上平坦面に位置する。すぐ東側にはSD1がある。II層除去後のIII層中で検出したが、底面付近しか残っておらず、本来はII層中から掘り込まれたと推定する。

遺構の壁はほとんど残存せず、西端の一部が攪乱されていたため現状での観察となるが、平面形は楕円形を呈しており、検出面での長軸は78cm程度、短軸は56cmを測る。検出面から底面までの深さは7~8cm程度となる。底面積は0.17㎡程度であり、主軸はN-76°-Eである。

現状での埋土は5層に分層できた。黒褐色土あるいは暗褐色土を主体とし、1~3層は地山ローム粒やロームブロックを含んでいた。遺物は埋土中から土師器の甕1個体分(144)と甕口縁部片1片(145)が出土している。出土遺物は、天神川区期併行に比定できることから、遺構の時期は古墳時代後期前葉と考える。



第125図 SK5



第126図 SK5 出土遺物

遺構の性格は、土器を埋置した土坑と考える。

SK7 (第129図、PL.106)

調査区中央の南壁際、G9グリッドの西寄りにあり、標高74.5m付近の丘陵上平坦面に位置する。遺構の南側は調査区外にあり、一部のみを確認

できた。Ⅱ層除去後のⅢ層中で検出した。北西側約4mにSK3がある。

一部のみの検出のため全体の形状は判然としないが、平面形は長方形もしくは方形を呈すると推定する。検出面での規模は北東-南西方向で1.2m以上、北西-南東方向で1.3m程度であり、検出面から底面までの深さは43cmを測る。底面は平坦で、壁はわずかに外傾して立ち上がり、断面逆台形状を呈する。検出部分での底面積は約0.57㎡であり、主軸はN-26°-Eである。

埋土は黒褐色土を主体とする4層に分層でき、3層では地山ロームのブロックを多量に含んでいた。皿状堆積であり自然堆積と考える。

遺物は埋土中から土器片が出土しているが、小片のため図化しなかった。

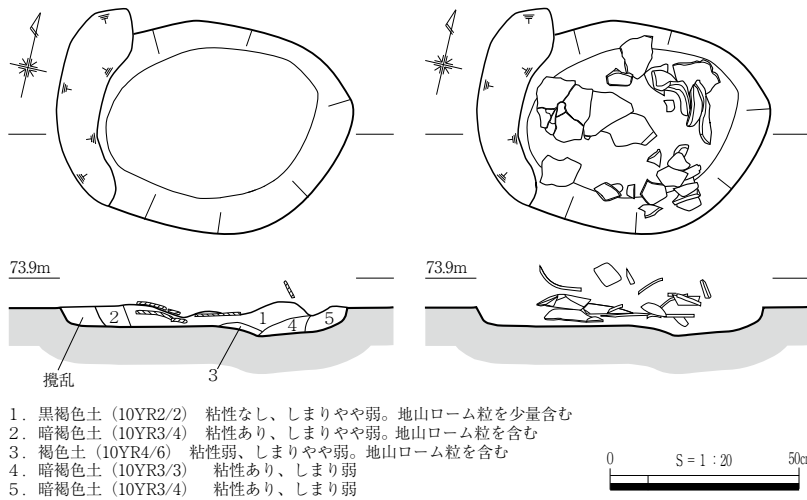
時期は出土遺物や埋土の状況などから、古墳時代後期前葉と考えられる。

遺構の性格は不明である。

SK8 (第130図、PL.106・117)

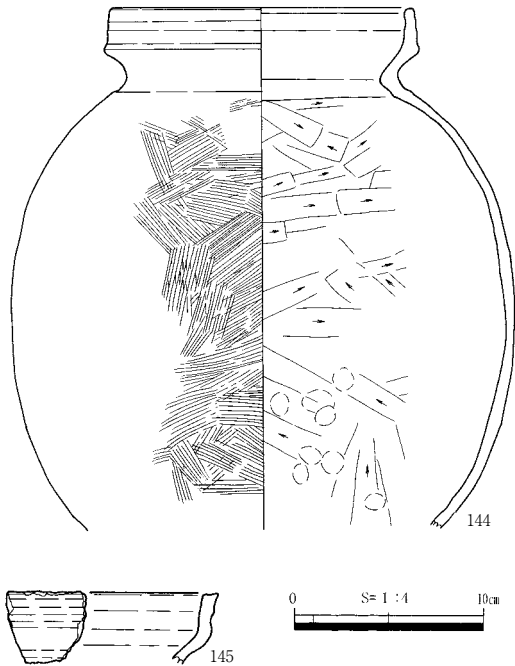
調査区中央よりやや西側、F11グリッドの中央付近にあり、標高74.0m付近の丘陵上平坦面に位置する。Ⅱ層除去後のⅢ層中で検出した。約6m北西側にはSI3がある。SD3によって西半分の一部を壊されていたが、底面はよく残っていた。

平面形は円形を呈しており、検出面での直径は86cm、検出面から底面までの深さは34cmを測る。床面は平坦で、壁は緩やかに外傾しながら立ち上がり、断面は逆台形状を呈する。底面積は約0.28㎡で



- 1. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性なし、しまりやや弱。地山ローム粒を少量含む
- 2. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性あり、しまりやや弱。地山ローム粒を含む
- 3. 褐色土 (10YR4/6) 粘性弱、しまりやや弱。地山ローム粒を含む
- 4. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性あり、しまり弱
- 5. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性あり、しまり弱

第127図 SK6



第128図 SK6 出土遺物

ある。
埋土は黒褐色土を主体とする3層に分層できた。2・3層では粘性・しまりともに強く、地山ローム粒を含んでいた。皿状に堆積することから、自然堆積と考えられる。

遺物は埋土中から須恵器高坏の脚部片(146)が出土した。

遺構の時期は、出土須恵器がTK23～TK47型式併行期に比定できることから、古墳時代後期前葉と考える。また、切り合い関係からSD3よりも先行する時期と考える。

遺構の性格は不明である。

遺構の性格は不明である。

6 溝

SD1 (第131・132図、PL.106・117)

調査区の中央よりやや西寄り、E9・E10・F10グリッドにあり、標高74.0m付近の丘陵上平坦面に位置する。II層除去後のIII層中で検出した。北側はSB1およびSB3と重複しており、北端付近をSK4によって壊されていた。平成22年度の確認調査時におけるTr.12のSD1である。

ほぼ南北に延びる溝であり、検出面での残存長は約16.5mを測る。溝はほぼ直線的だが、北端から約4mの位置でわずかに屈曲しており、屈曲点より北側の主軸がN-10°-Eで、南側がN-4°-Eとなる。断面は浅い逆台形状を呈し、検出面

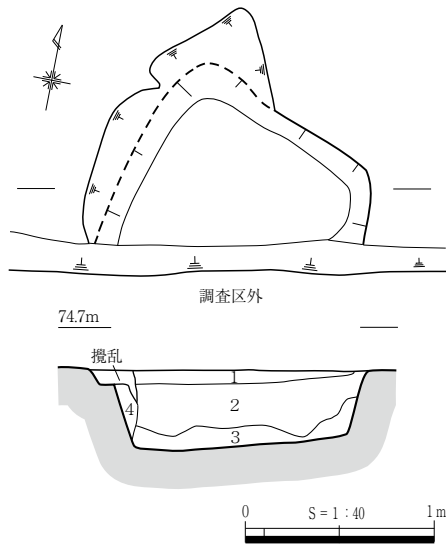
から床面までの深さは7cm程度であるが、実際はII層中から掘り込まれたと推定され、現状より深かったと考える。

埋土は黒褐色土の単層であり自然堆積と考える。

遺物は埋土中から、土師器甕の口縁部片(147)が出土した。

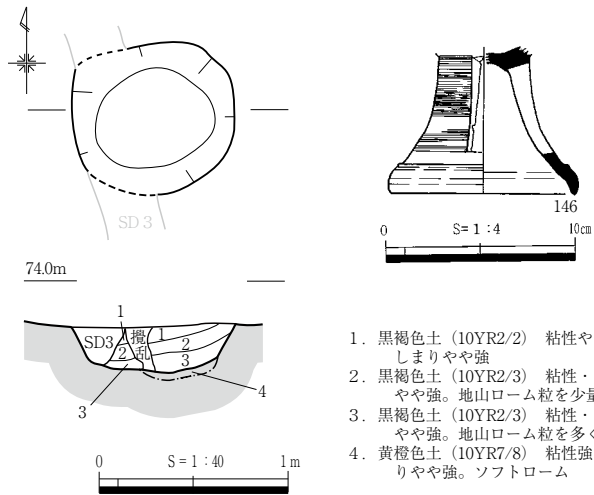
遺構の時期は、出土遺物から古墳時代後期に比定でき、切り合い関係からSK4に先行する時期と考える。

遺構の性格は不明である。



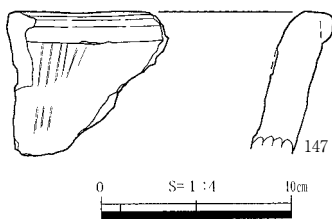
1. 黒褐色土 (10YR3/2)
2. 黒褐色土 (10YR3/2) 地山ローム粒を微量に含む
3. 黒褐色土 (10YR3/1) 地山ロームブロックを多量に含む
4. 褐灰色土 (10YR4/1) 黒褐色土と地山ロームブロック (明黄褐色) を斑状に含む。壁崩落土

第129図 SK7

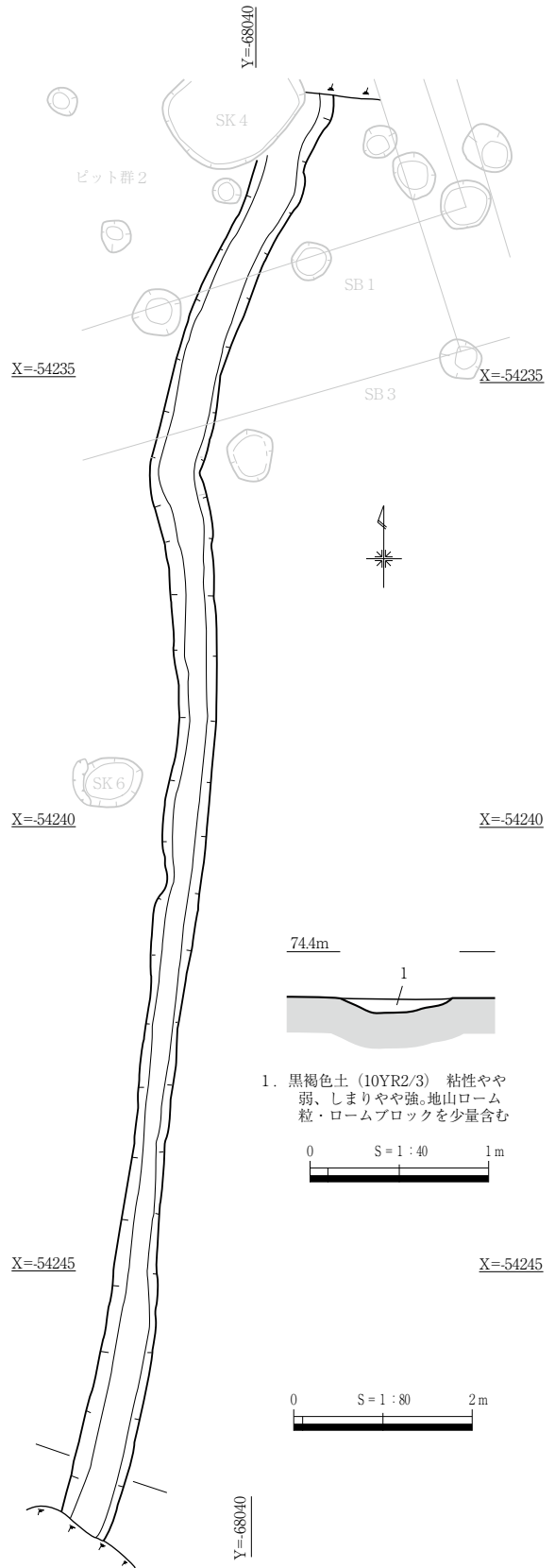


1. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性やや弱、しまりやや強
2. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性・しまりやや強。地山ローム粒を少量含む
3. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性・しまりやや強。地山ローム粒を多く含む
4. 黄橙色土 (10YR7/8) 粘性強、しまりやや強。ソフトローム

第130図 SK8



第131図 SD1 出土遺物



第132図 SD1



写真61 SI1・5作業風景



写真62 赤坂頭無し遺跡作業風景